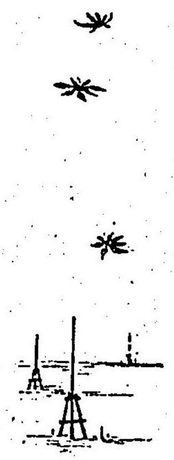
觸るゝ者は熱喝垢罵、骨に徹する者は瞋拳痛棒、見る者額を搔め、聞者肌に汗す、鬼神もまた涙を浮べつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其の初め來る時は、采玉、河晏か美貌有りて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島か形容枯稿顏色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂有つてか片時も湊泊する事を得んや。是の故に往々に參鶻度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疝癖塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐み是れを愁ひて、師不豫の色有る者連日、乍ち忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて、是に授るに內觀の秘訣を以てす。乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五內調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是れを治せんと欲せば、縱ひ華陀扁倉と云へども、輙く救ひ得む事能はじ。我に仙人還丹の秘訣あり。爾か輩試に是れを修せよ、奇功を見る事、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を拋下し、話頭を拈放して、先つ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず眼を合せざる以前に向て、長く兩脚を展べ、强く蹈みそろへ、一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々に此の觀を成すべし。我此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目なにの鼻孔かある。我此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家鄉、家鄉の何の消息かある。我が此の氣海丹田、總に此れ我が唯心の淨土。淨土何の莊嚴かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀。彌陀何の法をか說くと打返へし〳〵、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓠然たる事、いまだ篠打ちせざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將ち去て、五日七日乃至三七日を經たらむに、從前の五積六聚氣虛勞役等の諸症、底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り將ち去れ。此において諸子歡喜作禮して、密々に精修す。各々悉く不思議の奇功を見る。功の遲速は進修の精麤に依るといへども、大半皆全快す。各々內觀の奇功を讃嘆して休まず。師の曰く。爾が輩心病全快を得て以て足れりとする事勿れ。轉た治せば轉た參ぜよ轉た悟らば轉た進め。老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其の憂苦、諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心ひそかに思惟すらく、生きて此の憂愁に沈まんよりは、如かじ早く死して此革囊を捨てんにはと。何の幸ぞや、此の內觀の秘訣をつたへて、全快を得る事今の諸子の如し。至人の云はく、此は是れ神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歲なるべし。其の餘は計り定むべからず。予則ち歡喜に堪へず、精修怠らざる者大凡三年。心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事を覺ゆ。此處に於て重ねて心に竊に謂へらく、縱ひ此の眞修を修し得て、彭祖が八百の歲時を保ち得るも、唯是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の舊窠に睡るが如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪、鍍拐、張華、費張が輩を見ず。如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行じ、虛空に先つて死せず、虛空に後れて生

ぜざる底の不退堅固の眞法身を打得し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。此に於て眞正參玄の上士兩三輩を得て、內觀と參禪と共に合はせ幷らべ貯へて、且つ耕し且つ戰ふ事、蓋し玆に三十年、年々一員を添へ、二肩を增し得て、今既に二百衆に近し。其の中間方來の衲子勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐み、密に此の內觀の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉た悟れば轉た進ましむ。馬年今歲古稀に越えたりと云へども、半點の病患なく、齒牙全く搖落せず。眼耳次第に分明にして、動もすれば鑿凿を忘る。毎月兩度の法施終に怠倦せず。請に佗方に應じて三百五百の海衆を聚會して、或は五句七句を經に錄に雲水の所望に隨て胡說亂道するは、大凡五六十會に及ぶと云へども、終に一日も罷講齊を鎖さず、身心健康氣力は次第に二三十歲の時には遙に勝されり。是れ皆彼の內觀の奇功に依る事を覺ゆ。住菴の諸子各々悲泣作禮して云はく、吾が師大慈大悲願はくは內觀の大略を書せよ。書して留めて、後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師即ち頷す。立處に草稿成る。稿中何の說く處ぞ、曰く、大凡生を養ひ長壽を保つの要、形を鍊るにしかず、形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝るときは氣聚る。氣聚る時は即ち眞丹成る。丹成る時は形固し。形固きときは神全し。神全きときは壽し。是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに在るらくのみ。住菴の諸子此必要を勤めてはげみ、進んで怠らずんば禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到て年來疑團あらむ人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ。何が故ぞ、月高くして城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正廿五晋。窮乏菴主飢凍
炷香謹首題。



夜船閑話序

文章に耽る僧に示す。

百千の諸佛は心を以つて師とし玉へり。
身心を護惜して影の隨ふか如くせよ。
韓柳か文章たとひ世を駭すと雖も。
生死到來の時を如何せむとかする。

夜船閑話卷之上

山野初め參學の日、誓つて勇猛の修心を憤發し、不退の道情を激起し、精錬刻苦する事、既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す、從前多少の疑惑、根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して溫滅す。自ら謂へらく、道人を去る事寔に遠からず、古人三十二年是れ何の揑怪ぞと、怡悅蹈舞を忘るゝと數月、向後日用を廻顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊、總に脫洒ならず。自ら謂へらく猛く精彩を着け、重て一回捨命し去らんと。こゝにおいて牙關を咬定し、雙眼睛を瞠開し、寢食ともに廢せんとす。既にして未だ期月に亘らざるに、心火逆上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、擧措恐怖多く、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に淚を帶ふ。此において遍く明師に投し、廣く名醫を探ると云へども、百藥寸功なし。或人曰く、城の白河の山裏に巖居せる者あり、世人是れを名けて白幽先生と云ふ。靈齡三四甲子を閲みし、人居三四里程を隔つ。人を見る事を好まず、行くときは必ず走て避く。人其の賢愚を辨ずる事なし。里人專ら稱して仙人とす。聞く故の文山氏の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す、人あり禮を盡くして咨叩するときは、稀れに微言を吐く。退て是れを考ふるに大に人に利あり と。此において寶永第七庚寅孟正中浣、竊に行纏を着け濃東を發し黒谷を越え、直ちに白川の邑に

到り、包を茶店におろして、幽が巖栖の處を尋ぬ、里人遙に一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨て遙に山溪に入る。正に行く事里ばかりに、乍ち流水を蹈斷す。樵徑もまたなし、時に一老夫あり、遙に雲煙の間を指す。黄白にして方寸餘なる者あり。山氣に隨て或は顯はれ或は隱る、是れ幽が洞口に垂下する所の蘆籠なりと。予即ち裳を褰げて上る。巉巖を蹈み蒙茸を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露袴衣を歷す、辛汗を滴し、苦膏を流して、漸く彼の蘆籠の處に到れば、風致清絶、實に物表に丁々たる事を覺ゆ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗す。旦らく巖根に倚て數息すると數百、少焉あつて衣を振ひ襟を正して、畏づ〳〵鞠躬して籠子の中を望めば、朦朧として幽が目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に到り、朱顏麗しうして琛の如し。大布の袍を掛け輭草の席に坐せり、窟中纔に方五六笏にして全く資生の具無し。机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。予則ち禮を盡くして苦ろに病因を告げ且つ救ひを請ふ。少焉ありて幽眼を開いて熟視し、徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、橡栗を拾ひて食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此の外更に何をか知らんや。自ら愧づ遠く上人の來望を勞する事を。予即ち轉た咨叩して休まず。時に幽恬如として予が手を捉らへて、精しく五內を窺ひ九候を察す。爪甲長きこと半寸、慘乎として顙を拔めてつげて云はく、己哉、觀理度に過き、進修節を失して、終に此の重症を發す、寔に醫治し難き者は公の禪病なり。若し鍼灸藥の三つの物を恃んで、而して後に是れを救はんと欲せば、扁倉力をつくし華陀顙を拔むるも、奇功を見る事能はじ。只今既に觀理の爲めに破らる。勤めて內觀の功を積まずんば、終に起つ事能はじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予曰く、願はくは內觀の要秘を聞かん。學びがてらに是れを修せん。幽肅々如として容をあらため、從容として告げて曰く、嗚呼、公の如きは問ふ事を好むの士なり。我が昔し聞ける處を以て微しく公に告んか。是れ養生の秘訣にして、人の知る事稀れなり。怠らずんは必ず奇功を見ん、久視も又期しつべし。夫れ大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生ず、先天の元氣中間に默運して、五臟列り經脉行はる、衞氣營血、互に昇降循環する者、晝夜に大凡五十度、肺金は牝藏にして膈上に浮び、肝木は牡藏にして膈下に沈む。心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む。五臟に七神あり、脾腎各〻二神を藏くす。呼は心肺より出て、吸は腎肝に入る、一呼に脈の行く事三寸、一吸に脈の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脈一身を巡行する事五十次、火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し人察せず觀照或は節を失し、志念或は度に過ぐるときは、心火熾衝して肺金焦灼す。金母苦しむときは、水子衰減す。母子互に疲傷して、各〻五位困倦し、六腑凌奪す。四大增損して、各〻百一の病を生ず。百藥功を立する事能はず、衆醫總に手を束ねて、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は、常に心を下に專にし、暗君庸主は常に心を上に恣にす。上に恣にするときは、九卿樞に誇り、百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧る事無し。野に菜色

多く、國に餓莩多し。賢良潛み竄れ、臣民瞋り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶するに到る。心を下に專らにするときは、九卿儉を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝ事なし。農に餘まんの粟あり、婦に餘まんの布有りて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥え國強く、令に違するの悉民なく、境を侵すの敵國なし。國刁斗の聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。人身もまた然り。至人は常に心氣をして下に充たしむ。心氣下に充つるときは、七凶内に動く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず。營衞充ち心神健かなり、口終に藥餌の苦酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流はつねに心氣をして上に恋にす。上に恋にするときは、三寸の火、右寸の金を尅して、五官縮り疲れ、六親苦しみ恨む。是の故に漆園曰く、眞人の息は、是れを息するに踵を以てし、衆人の息は、是れを息するに喉を以てす。許俊が曰く、蓋し氣下焦に在るときは、其の息遠く、氣上焦に在るときは、其の息促まる。上陽子が曰く、人に眞一の氣有り、丹田の中に降下するときは、一陰また復す。若し人始初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是れが信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要せよ。下部は常に温暖ならん事を要せ。夫れ經脈の十二は、支の十二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一歳を全うするが如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是れを地雷復と云ふ。冬至の候なり。眞人の息は、之れを息するに踵を以てするの謂か。三陽下に位し、三陰上に居す、是れを地天泰と云ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象、人是れを得るときは、營衞充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上に止まる。是れを山地剝といふ。九月の候なり。天是れを得るときは、林苑色を失し、百卉荒落す。是れ衆人の息する喉を以てするの象。人是れを得るときは、形容枯槁し、齒牙搖落す。所以に延壽書に云はく、六陽共に盡く、則ち是れ全陰の人死し易し。須らく知るべし、元氣をして常に下に充しむ。是れ生を養ふ樞要なる事を。昔し吳契、初石臺先生に見ゆ、齋戒して鍊丹の術を問ふ。先生の曰く、我に元玄眞丹の神秘あり。上々の器にあらざるよりんば、得て傳ふべからず。古へ黄成子是れを以て黄帝に傳ふ。帝三七齋戒して是れを受く。夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり備の六欲を去り、五官各〻其の職を忘るゝときは、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ。是れ彼の大白道人の謂はゆる我が天を以て事ふる所の天に合せる者なり。孟軻氏の謂はゆる浩然の氣、是れをひきゐて臍輪氣海丹田の間に藏めて、歳月を重ね是れを守りて守一にし去り、是れを養うて無適にし去り、一朝乍ち丹竈を掀飜するときは、内外中間八紘四維、總に是れ一枚の大還丹。此の時に當て初めて自己即ち是れ天地に先づて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん。是れを眞正丹竈功成る底の時節とす。豈に風に御し霞に跨り、地を縮め水を踏む等の鎖末たる幻事を以て懐とする者ならんや。大洋を攪いて酥酪とし、

厚土を變じて黄金とす。前賢曰く、丹は丹田なり、液は肺液なり。肺液を以て丹田に還へす。是の故に金液還丹といふ。予が曰く、謹んで命を聞く、且らく禪觀を拋下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ處は、李士才が謂はゆる清降に偏なる者にあらずや。心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからむか。幽微々として笑つて云はく、然らず、李子いはずや、火の性は炎上なり。宜しく是れを下らしむべし。水の性は下れるに就く、宜しくこれをして上らしむべし。水上り火下る。是れを名けて交と云ふ。交るときは既濟とす。交らざるときは未濟とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂はゆる清降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊を救はんとなり。古人云はく、相火上り易きは、身中の苦しむ所、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して、靜を主り、相火は下に處して、動をつかさどる。君火は是れ一心の主なり、相火は寄輔たり。蓋し相火に兩般あり。謂はゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に比す。是の故に云ふ、龍をして海底に蟄せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海か澤か、水にあらずといふ事なし。是れ相火上り易きを制するの語にあらずや。又曰く、心勞煩するときは、虛して心熱す。心熱するときは、是れを補するに心を下して以て腎に交ふ。是れを補と云ふ。既濟の道なり。先きに心火逆上して、此の重痾を發す、若し心を降下せずんば、縱ひ三界の秘密を行じ盡したりとも、起つを得じ。且つ又我が形模、道家者流に類するを以て、大に釋に異なる者とするか、是れ禪なり。他日打發せば、大に笑ひつべきの事有らむ。夫れ觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者は邪觀とす。向に公多觀を以て此の重症を見る。今是れを救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間にをかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん。是れ眞觀清淨觀なり。云ふ事なかれ、しばらく禪觀を放下せんと。佛の言はく、心を足心にをさめて、能く百一の病を治すと。阿含に、酥を用ふるの法あり。心の勞疲を救ふ事尤も妙なり。天台の摩訶止觀に、病因を論ずる事甚だ盡くせり。治法を說く事も亦甚だ精密なり。十二種の息あり、よく衆病を治す。臍輪を緣して豆子を見るの法あり。其の大意心火を降下して、丹田及び足心に收むるを以て至要とす。但た病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く。蓋し繫緣諦眞の二止あり。諦眞は實相の圓觀、繫緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是れを用ふるに大に利あり。古へ永平の開祖師、大宋に入て如淨を天童に拜す、師一日、密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子、坐禪の時、心を左の掌の上におくべしと。是れ即ち顗師の謂はゆる繫緣止の大略なり。顗師初め此の繫緣內觀の秘訣を敎へて、其の家兄鎭愼が重痾を、萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に說けり。また白雲和尙曰く、我つねに心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し衆を領し、賓を接し機に應じ、及び小參普說七縱八橫の間において、是れを用ゐてつくることなし。老來殊に利益多き事を覺ゆと。寔に貴ぶ

べし。是れ蓋し素問にみゆる『恬澹虚無なれば眞氣是れにしたがふ精神内に守らば病何れより來らむ』といふ語に本つき玉ふ者ならむか。且つ夫れ内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八万四千の毛竅、一毫髮ばかりも缺點の處なからしめん事を要す。これ生を養ふ至要なる事を知るべし。彭祖が曰く、和神導氣の法、當さに深く密室を鎖ざし、牀を安じ席を暖め、枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて、動かざる事三百息を經て、耳聞く處なく、斯の如くなるときは、寒暑も侵かす事能はず、蜂蠆も毒する事能はず。毒三百六十歳、是れ眞人に近しと。又蘇内翰が曰く、己に飢て方に食し、未だ飽かずして先つ止む。散歩逍遙して、務めて腹をして空からしめ、腹の空なる時に當て、即ち靜室に入り、端座默然して出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に至り、百より數へ放ち去て千に至りて、此の身兀然として、此の心寂然たる事虚空と等し。斯のごとくなる事久うして、一息おのづから止む。出でず入らざる時、此の息八万四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん。此の時人に尋ねて路頭を指す事を用ゐず。只要す尋常言語を省畧して、爾の元氣を長養せん事を。是の故に云ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に默すと。予が曰く、酥を用ふるの法、得て聞きつべしや。幽が曰く、行者定中四大調和せず身心共に

勞疲する事を覺せば、心を起して應さに此の想を成すべし。譬へば色香清淨の輭蘇鴨卵の大さの如くなる者、頂上に頓在せんに、其の氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるほし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁脛骨次第に沾注し將ち去る。此の時に當て胸中の五積六聚、痃癖塊痛、心に隨て降下すること、水の下につくがごとく、歴々として聲あり。遍身を周流し、雙脚を溫潤し、足心に至て即ち止む。行者再び應さに此の觀を成すべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積もり湛へて、暖め蘇す事恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是れを煮湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪已下を漬け蘇すがごとし。此の觀をなすとき、唯心所現のゆゑに、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄に妙好の輭觸を受く。身心調適なる事、二三十歳の時には遙に勝れり。此の時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず。若しそれ勤めて怠らずんば、何れの病か治せざらむ、何れの德かつまざらん、何れの仙か成ぜざる、何れの道か成ぜざる。其の功驗の遲速は、行人の進修の精麤に依るらくのみ。我始め卯歳の時、多病にして公の患に十倍しき、衆醫總に願みざるに到る。百端を窮むといへども、救ふべきの術なし。此において上下の神祇に祈り天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや計らずも此の輭酥の妙術を傳受する事を。歡喜に堪へず、綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半銷除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。凝々兀々、月の大小を記せず、年の閏餘を知らず、世念次第に輕微にして、人欲の舊

習もいつしか忘れたるが如し。馬年今歳何十歳なる事もまた知らず。中頃端由有りて、若丹の山中に遭逢する者、大凡三十歳、世人都て知る事なし。其の中間を顧るに、恰も黄粱半熟の一夢の如し。今の此の山中無人の所に向て、此枯槁の一具骨を放て、太布の單衣綫に二三片を掛け、嚴冬の寒威綿を析くの夜といへども、枯膓を凍損するにいたらず。山粒すでに斷えて殺氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺もなき事は、皆此の觀の力ならずや。我今既に公に告ぐるに、一生用ひ盡し得ざる底の秘訣を以てす。此の外更に何をか云はんやと云つて、目を收めて默座す。予も亦涙を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末綫に殘陽を掛く、時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで、畏づ〳〵回顧すれは、遙に幽が巖窟を離れて自ら送り來るを見る。即ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し、恐らくは蹄客を惱さん。老夫しばらく蹄程を導かんと云つて、大駒履を着け、瘦鳩杖をひき、巉巖を踏み嶮岨を陟る事、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下りて、彼の溪水の所に到つて、即ち曰く、此の流水に隨ひ下らば、必ず白川の邑に到らむと云つて、慘然として別る、且らく停立して幽が回步を目送するに、其の老步の勇壯なる事、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し、且つ羨み且敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐する事能はざる事を。徐々として歸り來て、時々に彼の內觀を潛修するに、綫に三年に充たざるに、從前の衆病、藥餌を用ひず鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず、從前が手脚を狹む事得ず、齒牙を下す事得ざるの底の難信、難透、難解、難入底の一着子、根に透り底に徹して、透得過して大歡喜を得る者、大凡六七回。其の餘の小悟恰悅、踏舞を忘るゝ者數をしらず。抄喜の謂はゆる大悟十八度小悟其の數を知らずと。初めて知る、寔に我を欺かざる事を。古へ二三稱の襪を着くといへ共、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今既に三冬嚴寒の日と云へども、襪せず煖せず、馬齒すでに古稀を越えたりといへども、指すべき半點の小病もまたなき事は、彼の神術の餘勳ならんか。云ふ事なかれ、鵠林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して、以て佗の上流を誑惑すと。是れつとに靈骨あつて、一槌に既に成ずる底の俊流の爲に設くるにあらず、癡鈍予が如く、勞病予に類する底、看護して子細に觀察せば、必ずしも少しき補ならんや。只恐る別人の手を拍して大笑せん事を。何が故ぞ、馬枯筴を咬んで午枕に喧し。

夜船閑話卷之上終

蛤蜊觀音
螺師蚌蛤の類。
一睡に一千年。
佛の出世に逢はず。
補陀の古老仙。

夜船閑話卷之下

何某之國何城の大主
何姓何某侯の閣下

（近侍の需めに應ぜし草稿）

當春は龍津綫若において、維摩會中、毎度緩々と高慮を得しめ、怡悅淺からず存ぜしめ候、增〻御機嫌よろしく御在府の旨、珍重此御事に候、老夫隨分無事にて、御發駕の後方々首尾よく相勤め、漸く四月下旬に歸院致候、當夏は、別而大阪御勤番の御支度に依而、公務……

……

（此より次頁掠虚の妄談といふに至る恐らくは衍文あるべし今原書の儘を錄して後考に資す）

夜船閑話卷之下

是を掠虚の妄談と云ふ、若し又、雄畧兼備へさせ玉ふ名將おはして、此等の癡言を聞かせ玉はゞ、腹を抱へて大笑し玉はんか、何が故ぞ、狩場に臨み、君侯の左右を圍みて、進退聚散、影の如くに追隨せん人々は、盡く是譜代重恩の老從、智勇兼備の執權にして、賤小鄙微の歩卒の族には遙に異なり、五人にもせよ、十人にもせよ、彼の甲陽の廿四將と稱せられ玉ひし人々の如く、一騎當千、萬一國家の大事あらん時、何れも鞍馬に跨りて、或は五百騎、或は千騎を卒して、一虎口の固めの大將軍たるべし、其餘は、主君の左輔右弼、先陣後陣の副將たるべし、斯〻る貴き諸將の身として、賤しき雜兵に交り、歩卒に混じて、日頃狩場にて修錬し置きたる武道なるは、是見よと、云はぬ計りに、正兵奇兵の備も知らず、足には泥土の切れ草鞋はきし

め、肩には賤しき鐵砲を、いかめしげに打掛け、主君の本陣は、野とならんも、山とならんも願みず、正躰もなくかけり行き、敵に若し其智計有りて、引ては支へ、支へては引き、究竟の殺處におびき入れて、玉も藥も盡き果てたる坪を見込み、横合より奇兵を出して、道を切らば、不覺の戰死は必定なるべし、萬一宗徒の諸將の中、一騎を失ふ者ならば、諸軍大に顯氣を失して、味方上なき弱味ならずや、兎にも角にも、諸大將の恃みにし玉ふまじきは、似合ぬ鐵砲の賤術なるべし、六韜に云はく、兵は不祥の器なり、止む事を得ざれば用うと、譬へば、荒旱の時、民皆簑笠を被して雨を乞ふに、久しからずして、天必ず雨ふるが如く、太平の時、鹿狩り鷹野と名付けて、黎民修農の節を妨げ、耕作の邪魔して民間の悲歎に管せず、不祥の戈戟を動し、火砲を放たば、必ず久しからずして、止む事を得ざるの兵亂あらんか、民若し猪鹿の害を苦しみ、萬一射獵を願ふ事あらば、宜しく諸卒を遣はし、狩り逐はさば足れらくのみ、尋常射獵を數奇好ませ玉ふ諸將の、獨もおはさぬ山里も、世間には數限りなけれど、夫とても粟稗に事欠きて、飢え渴へたる村里もなく、諸將の御情にて、折々弓鐵砲にて狩り逐ひ給はせ玉ふ村里とても、格別に富貴にも見え侍らず、諸君の御陰にて、粟稗に持ちあぐみたる取沙汰もなし、然れば、即ち玉藥を費し、强に諸君の世話やかせ玉ふも、詮なき事ならんかし、太平の時、諸將の嗜み、心掛け玉はんず武道は、王佐の才を抽んて、國泰民安の仁政を宗とし、古今治亂の書典を探り、六韜三略の奥義を考へ、百王百代の仁義を見渡し、民

肥え、國强く、君安く、臣正しきを以て、政務の至要とす、是則、文武兼ね備へ玉へる、忠義の武士の第一の嗜なるべし、古昔、甲陽武田家の盛なりし時、尋常仁政を專一とし、民を憐み玉ひければ、民間次第に豐饒にして、國中皆堯年を樂みしかば、海内無雙の强國となりぬ、此時、列國の諸侯、互に軛を爭ひけれども、甲州一國、籠坂古關等の四方の國境に、終に敵軍の駒の蹄を入れず、黎民終に刁斗の聲を聞かず、是故に、海内盡く武田の勢威を恐る、是皆仁德の致す所にして、鐵砲戈戟の功にはあらず、去る程に、甲陽多少の諸將の中、武士の嗜なりとて、玉藥を腰に挾み、似合はぬ鐵砲を肩に打かけ、いかめしげに、喚き叫びて、野山をかけ走り玉へるは、一人も聞及ばず、斯くては、果して子孫次第に繁榮して、淡家四百年の富貴を保ち玉ふべきに、子息勝頼に至りて、新羅どのより、二十八代の家系を敢なく失ひ玉へることそ怪しけれ、如何樣、是は父子の間に、天理にも背き玉へる程の政務の錯りありし故なるべし、一國一城の主たらむ人々の榮とし玉ふ所、何事か之に如かんや、熟〻思ふに、大樹神君天下を一統せさせ玉ひて後、五老を据ゑ、五緯を擇みて、万機を五老に打任せ、大樹は、代々一向いろはせ玉はず、又た、執權の臣一人の心にも任せず、五賢互に正し、定めて、仁恕を以て標榜とす、是を以て、神君より以來、天下大に定まりぬ、貴ぶべし、堯、舜、禹、湯、の聖主といへども、思ひ付かせ玉はざる聖政、漢、魏、晉、宋、齊、梁、陳、隋、唐、宋、元、明の間にも比類こそおはせね、閣下も亦た、君臣位異に、小大品殊なりといへど

も、願くは、密に神君の明政を學び玉ひ、尾奥二藤等の五賢を擇び揚げ抽んで、彼の神君の五緯になぞらへ、萬事を五賢に打任せて、閣下は穆々として、打坐し玉ひて、生民を扶け、救ひ玉ふべき御工夫の外、一向思慮を加へ玉はず、只尋常默々として、何の望みもなく渉らせ玉はゝ、果して國夫れ安からん乎、古へに云はく、良禽は樹を擇びて栖み、貞臣は主を撰びて佐くと、若し夫れ、一日賢明仁恕の明主に逢はゝ、身命を惜まず、忠丹を抽んで、宜しく輔佐すべきの時なり、人の臣たらん身の、何時をか待たんや、五賢も亦た、互に誓ひ、貞亮を組みて、以て帶とし、純素を束ねて、以て履とし、仁道是勤めば、自然に國肥え、民豐ならむ、然らば即ち、人の臣たるの盛事にして、是に過ぎたる忠烈は之れあるべからず、恐れても、怖るべきは追從輕薄の佞臣なり、是等の邪黨は、片時も君の傍に立しむべからず、邪臣君の傍に在る則は、覺えず君をして邪徑に陷らしむ、正臣君の側に在るときは、いつしか君をして正路に進ましむ、邪臣とは何をか云ふや、常に君の傍に在りて、忠貞の賢臣を憎み嫌ひ、時を窺ひ、機に乘じて、或は謗り、或は譏して、果ては是を棄て遠ざけん事を願ふ、暗主は臣下の賢愚を知らず、邪正を分たず、終に彼が佞言を信じて、果して彼の貞節仁恕の忠臣を忌み遠ざく、惜しむべし、悲しむべし、此において、佞臣大に嘉運を開らきて、上下盡く彼れが掌に歸し、細大皆彼が心に任かす、謂つべし、鸞鳳竄れて鴟鴞翼を展べ、賢良去りて佞士眉を開らくと、佞臣若し夫れ、酒を要する時は、君に酒宴を勸む、君侯少しく頷する色ある時

は、自ら厨下に下りて、君命なりと稱し、珍膳を催し、佳肴美味を調へ、終夜飲宴して休まず、眦を收めて歌ふ者あり、聲を放ちて泣く者あり、齒を切りて瞋る者あり、君侯も亦た貴き正心正意を失ひ、共に歌ひ、共に躍り、終に天明に至る、千態萬狀、狂するが如く、癲するに似たり、終夜呑みて酒何石を費す、誰か計らん、盡く是れ百姓の肉、民間の膏なる事を、之れ他なし、佞臣綫に酒を欲する一念より興りて、一城盡く此狂態を究む、實に惜むべし、邪臣一日射獵を思ふときは、奇計を設けて、侯に射獵の事を慫慂す、君侯綫に頷する色あるときは、君命なりと稱して、近習を促がし、外樣を觸る、終に領内遠近の村民をかり立て、大に陣勢を張り、貝鐘を鳴らし、四方を圍みて、山野を責む、狐兎狸狢の類、禽獸麋鹿まで、周章恐怖して、度を失ひ哀鳴悲號して、遁れ走るといへども、四面皆歩卒なれば、出るに道なく、遁るに隙なし、戈戟に破られ、箭先にかゝりて、頭腦盡く地に塗れ、流血山野をひたす、其苦患、地獄の衆生にも過ぎたり、禽獸の汝に於ける、何の咎かある、倆の禽獸における、何の寃かある、其罪累何れの處にか歸せんや、近習外樣の中にも、因果を撥無し、報應を忘れ、殺業を好む人は、見孫必ず短命にして、家系もまた多くは斷絶するのみにあらず、死後には、果して叫喚焦熱等の大惡處に墮して、俱底恒沙の苦患を受くる事を忘れて、無益の殺業を好まざる人々も、君命に隨ひ、催促に應じて、好まぬ戈戟を提さげ、面白からぬ矢聲を出して、歩卒に隨ひて、前驅す、領内の細民、窮巷の貧士といへども、下々の人に、上々の智ある

底は、乃ち云はく、夫殺生は、四重禁戒、十重禁の冠首、三百五百の戒躰の本根なり、是を破る者は、三百五百の戒躰を同時に破るに齊うして、破戒の中の破戒、惡業の中の大惡業なるが故に、永劫無間焦熱の地獄の底に墮して、果てしも無き極苦を受け、現世には子孫必ず斷絶す、恐れても、怖るべきは殺生無慈悲の大惡業なり、と云うて、尋常虫けらの類までも、妄りに殺害せざる底の後世者も、官吏に責められ、歩卒に驅られて、思ひ寄らざる惡業を作り、未來永劫、肉抹骨磨の苦患を受く、是れ唯、邪臣射獵を欲する細念より起りて、多少善心修福の人々をして、面白からず、心にも染らぬ惡業を積ませ、惡處に陷墜せしむるのみにあらず、剩へ、有德慈善の主君を勸めて、上もなき罪累を修せしめ、生前無量萬善萬行の宿福を削り落し、心ならざる惡人とす、天神疎み離れ、地祇瞋り憎み、子孫必ず短壽にして、國脈も亦た斷絶するに至らしむ、制しても制しつべきは、殺生不仁の惡遊なり、亡國の前表、不祥の大兆、人禍あらずんば、必ず天罰を受けん、智鑑高明の君子の目には、赤子の井に赴くを見るが如けん、若し夫れ、幕下に貞正智德の賢臣、果敢忠烈の勇士あらば、五個三個、志を合せ、主心を居え定め、軀命を顧みず、身上に替へても、爭ひ諫めて、此凶遊を禁止せしめば、寔に莫大の忠烈ならむ、豈同斷の大事あらむを待て、箭表に立ち塞りて、主君の一命に代らんのみを、忠節なりとし、座ながらにして、此不祥を見すてゝ、其亡ぶるを待つ者ならんや、往々に、其不善を知り、其不吉を見ながら、身上を顧み、軀命を惜みて、心にも浮ばぬ佞言を吐き、今日の狩場には、稀代の御手際を、一度も二度も見奉りしなど、片腹痛き追從輕薄して、終に片言の忠諫を棒げず、末は兎もあれ、只今日無事にして、妻子を養ふを以て、足れりとする者あり、往々に、當代の無智不覺のうつけ武士の曲に、動もすれば、即ち謂へらく、夫武士たらんず者は、常に射獵を好んで、山野を馳せ廻りて、手足をかためざれば、國家の大事あらん時に、手足輭弱にして、一向動き働く事得ず、此故に第一武士の忘るべからざるの至要なりと、……

（以下「讒諂追從の佞臣」云々に至る間、亦た數行の脫文あるべし、姑らく原本に從ふ）

讒諂追從の佞臣を追退け、明眸皓齒の婢妾を忌み棄て、夏冬の衣類も都て綿布にし去り、朝夕の膳部も常に一菜に過ぎず、萬事を省略し、將ち去りて、其餘計を放ちて窮民を救ひ、老病を憐み玉ふより外、縱令堯舜禹湯文武の君といへども、別の手段是あるべからず、此こに人あり、我は是れ施を行ずる人なりと稱して、猥りに衆僧を供養し、諸乞を集めて、日々に施し月々に與へて、田畠を賣り放ち、妻子も養ふ事能はざるに到らば、是れ狂施にして、信施にあらず、空敷許多の錢穀を費して、功德も亦た無けん、若し夫れ、眞正施を行ぜんとならば、實情の美志を發して、身をつめ、心を苦しめ、儉を勤め、約を守りて、自家の殘餘を分けて、一ヶ最下の乞人に與へば、是實に信施ならくのみ、功德も亦た限り無けん、譬へば、一國一城の主たらむ人も亦然り、我は疾より仁澤を行ずべきぞと稱して、妄りに施し、みだりに與へて、倉庫を傾け盡くして、果ては、財用足らざる

に到る、此こに於て、苛政を設け、酷吏の輩を放ちて、民間に横行せしめて、民の財利を掠め奪ふ、此くして終に、國衰へ民苦しむ、是寔に狂政ならくのみ、仁政にはあらず、眞正仁澤を行ぜんとならば、宜しく自ら計りて驕奢を禁じ、浮費を制し、節儉を守り、枯淡を喫して、自家の餘分を與へて、以て黎民を惠まば、謂つべし仁政なりと、其澤兒孫に傳はりて、國脉必ず健康ならん、閣下の大幸には、天性仁恕の心をはして、賢を貴ひ、諫めに隨ひ、殊更、幕下に善き人々餘多得玉ふこそ、目出度けれ、各〻忠恕の操履有りて、讒佞收斂の醜態なし、此故に、領内は云ふに及ばず、遠村近里、及び雲水の僧侶までに、房州侯の如きは、御身上には過きたる、好き人々を持たせ玉ふ者哉と、沙汰し侍る由、老夫も、陰ながら、如何計り隨喜し侍り、中に就いて、尾氏、奥氏、近藤、二藤、阿部の人々の如きは、勇皮あり、仁體あり、寔に當世の人傑にして、房州幕下の五虎老將と稱して愧づべからす、其餘の老夫が、いまだ面謁せざる處の、近習外樣の人々も、亦定めて、優劣なけん、願くは、此嘉運に乘じて、君臣ともに志を合せ、計を定めて、膽を嘗め、血を啜りて、誓て節儉を守り、其餘力を分ち、生民を安撫し、仁澤を施し玉ふ事、三四年を歴ば、國夫れ再び蘇活せんか、此において、以て足れりとせず、身を潜め、心を苦しめ、專ら仁政を勤め行ひ玉はゞ、いつしか、君を堯舜の君にし、民は堯舜の民たらむ、此時に當りて、天神鎮に鎮護し、地祇不祥を呵禁して、子葉繁茂し、孫枝發越して、國脈必ず泰山の安きが如けん、大凡、國家に主として、國家を全うせんとならば、廣く仁澤を施すに越えたる事は是あるべからず、大樹神君の御仰に、妄りに人の國を目がけて、戈戟を動すは劫盗武士の業なりと、又古き文には、鵜鷹の逍遙を好み、無益の殺生を樂むべからずと、夫殺生は、國家に益なし、多くは民の農業を妨るが故に、諸侯に益なし、其人必ず短壽にして、子孫多くは斷絶する故に、來生に益なし、必定惡處に墮するが故に、古へ、鎌倉の右大將家の左右に邪臣ありき、初は、開國の功臣なりしが、久しからずして、大惡願を發して、心に竊に謂へらく、我願くは、良策を廻らし、幕下を世に無き者にし奉らば、天下の權柄は必ず我が掌握に歸せんず者を、と思ひ立ち、邪計を廻らし、偷策を設け、幕下の親眷を蠹害し、股肱の良臣を讒し退け、羽翼の賢佐を罪し失ふ、獨り幕下に到りて、手脚を下す事得ず、專諸が輩を募り招き、荆軻が族を備ひ入れて、晝夜に忍び窺はしむといへども、近づく事を得ず、此において、一員有驗の僧を請して、晝夜に呪咀せしむといへども、寸驗なし、一日驗者竊に來り謁して告げて言はく、我數月丹悃を抽んで、大法秘法を薫練し、百端を究めて、精誠を凝らすといへども、半點の靈驗無し、此故に、龜を燒き、瓦を打して筮し考るに、此人の如きは、前生多少の大善行を修したる大福德の人なり、其上、蛭が小島に於いては、八百部の法華經を讀誦し、三島神社の靈社へ日參まてし玉へる程の大善人なれば、千佛擁護の眦を垂れさせ玉ひ、萬神鎮衛の跡を示す、中々我等が呪力の企て及ぶべき事にしあらず、去りながら、行人希代の謀策を設け、此人をして大惡業を行ぜしめば、

前世の宿禍は、霜露の如く消え失せ、善神盡く見すて玉ひて、所望立處に成就すべし、左も無からん限りは、歳月を重ねて、呪咀したりとも、夢にも感應は是あるべからずと、臣の曰く、何をか大悪行とは云ふや、僧の云く、豈他あらんや、殺生の大罪業なりと、臣曰く我若し他をして、殺生を行ぜしめんは、何んの難き事か是あらん、そは掌を返へすよりは易き間の願にこそあれと、許諾し、來日、幕下に見えて、熟話の次、謹んで奏して云く、此程、駿甲兩國の村民ども、傳奏に膝行し、嘆願して云はく、扨も、近年以來、駿甲兩國の間に、猪鹿夥しく發興して、豈は富士野の木立の茂みに竄れて暗り、夜は村里に忍ひ寄りて、田畠を蹈崩し、禾稼を狼藉する事、前代未聞なり、細民共、種々方便を廻らし、昼夜に驅り逐ひ退くといへども、隻手を伸べて、大河を決留めんとするが如し、氣盡き、力究まれども寸功なし、御慈悲を以て、御上の御威勢を添へさせ玉はずば、蠏く制し退く可らず、夫細民の恃む處は、田畠のみ、細民の命は、黍稷にかゝれり、黍稷にあらずんば、續ぎ得べからず、然るに、今此荒蕪を見る、民間次第に窮餓相煎じて、野に菜色多し、久しからずして、駿甲兩國の遠村近里、大半蓬蒿の野とならんとす、此故に、老たるを負ひ、幼を携へて、盡く他國へ走らむとす、先祖の墳墓を叩きて、悲泣する者あり、老幼互に手を取りて、慟哭の聲野に震ふ、問ふも、問はるゝも、皆泣き、行も歸るも、盡く涙を帶ぶ、此故に、兩國の村民大小殘らず、東を望みて拜伏し、頭を叩きて悲泣して云く、謹み冀くは、聖君大樹、大駕を廻らし、御出馬あり

て此患難を救ひ扶け玉へかし、千萬御公儀の御慈悲を願ひ奉ると、血の涙を流して、訟へ出るもの再三、中々見捨て難き大義にて侍り、今の代に當りて、此災患を救ひ玉はんず人は、我君にあらずして夫誰そや、殊更御治世以來、いつにも、させる御遊を催させ玉ひにたる、覺えこそ侍られ、是を序に、淺間の煙、富士の雪、其外田子の浦浪、三穂の松原など、目下に見おろさせ玉ひたらば、上も無き御遊興にておはすべきぞ、一は又た、幕下の諸將、及び諸卒をさへに、御治世の後、四海波靜に侍るからに、上下皆美酒の惑ひに耽りて、箭柄取る事も打忘れて、手足の輕弱なる事、兒女の嗤の如し、此同斷大事あらむ時に、一虎口の固めも相叶ふべうも、見え侍らず、彼等が手足の堅めにも侍れば、狩場に臨みて、嶮崖に驅り上せ、幽谷に追ひ下し、七縱八横、かけまはらせ、諸將の勝劣、歩卒の強弱をも、御覽あらば、是又、武道の地に落ちざる一助なるべし、殊更、萬民の悲歎を救ふ御仁政なる者を、何の憚り、恐れさせ玉ふ事か候べきと、左も有りそうに相演るは、仁義勇略、兼ね備へ、四辯八音、瀧の水底つめたくも恐しと、知る人なきこそ憂てけれ、右幕下、且らく冠を傾け、御思案ありて、我幼少の時、池の禪尼の御教に、夫殺生は、一切戒行の中の大禁戒、悪行の中の大悪行、是れを破る者は子孫必ず斷絶し、死後には果して悪處に墮すと、聞き及びたりければ、蚊虻螻蟻の類までも、妄りに殺害したる覺えなけれ、去ながら、此度の一件は、小を殺して大を助くる仁政、殊には、亦た身を捨てゝ物を利するは、菩薩の大行なりと聞く者を、何かは以

て、苦しかるべき、時日を移さず發向せん、其旨宜く相觸るべしと、上意あれば、邪臣は頭を壘に摺付け、殿下萬歳萬々歳、天晴仁恕の御政道やと、悅びの色面に溢れ、こぼれんとす、右幕下も、いつに勝れて、御氣色麗はしく、萬事は儛に任するぞと、御坐を立たせ玉ひけるは、一世一度の御不覺と、知し召さざりしこそ悲しけれ、邪臣は悅び勇み立ち、さて好き坪に驅り入れたり、其獲物熊にあらず熊にあらず、天下既に定まりぬ、執權々柄手に入ッたりと悅びあへるこそ恐ろしけれ、此事四方に隱れなく、次第〳〵に觸れ流がせば、城内城外、騷ぎ立ち、馬物の具の塵打掃ひ、大刀長刀の錆押落し、上下のゝめきあへりけるに、間も無く、右幕下、佳日を擇び御出馬ありて、左備へ、右備へ、先陣後陣、嚴かに隊伍を亂ださず、進發す、和田、秩父、千葉、小山の諸大名、思ひ〳〵の狩裝束、綺羅星を輝かし、戈戟天を照らしければ、草木もうき立つ計りなり、程なく、大駕富士野の狩屋に御着座あれば、駿甲兩國の村民ども、鎌倉勢に指加はり、何十萬といふ數を知らず、裾野をせましと、七重八重に追取卷き、貝を吹立て、鐘打鳴らし、をめき叫んで晝夜を分たず責め苦しめける程に、物の命を害する事、算數の外に超過せり、去程に、佞臣と有驗の僧とは、共に鎌倉に在りしが、此事を傳へ聞きて、目出度し〳〵、心地好し、此人縱令前生にて持齋し、持戒し、讀誦し、書寫し、難行し、苦行し、有らゆる福聚を積み重ねたりとも、此度の逆罪に、根も葉も殘らず殺ぎ落し、我願成就は面のあたり、我願成就するならば、必ず一區の精舍を營み、此大功に報ずべ

しと、悅び勇むぞ情なき、之につけても、國家を治むる名將は、邪佞の臣を恐れ玉ひ、急に忌み棄て玉ふべし、開闢より以來、天子より諸侯に至るまで、佞臣の奸計に罹りて、國を亂し、家を破り、身を失ひ、後を斷ち玉ひたる人々は、幾千萬といふ數を知らず、佞臣とは、其初め無雙の寵臣の果なり、寵臣とは、今の所謂出頭人是なり、古人云く、君の心を知らんと欲せば、其君の常に愛し近くる輩を見て、君の賢愚を知るべしと、是實に萬古不易の金言なり、賢君は、常に賢人を近け愛し用ゐ、暗主は、常に佞臣を憐み寵す、佞臣は必ず追從輕薄を以て急務とす、暗主は彼れが追從を見て、無双の忠臣なりとし、之に授くるに爵祿を以てし、之に與ふるに冠蓋を以てす、此故に、爵祿日々に增し、階位月に進んで、威權いつしか衆臣の頂を極む、夫佞臣の常たる、己に諂らひ隨ふ者をば、君に勸めて次第に昇進せしめ、己れに諂らひ隨はざる者をば、竊に君に讒して之れを追ひ退く、此故に群臣尊卑彼に追隨する事、君侯の如く、彼を恐懼する事、斧鉞に過ぎたり、是において、寵を恃み、權に誇りて、邪臣が心に竊に謂へらく、嗟夫れ願はくは君侯なからんか、若し君侯徹りせば、我夫れ一國の富貴を掌にせん者をと、之より肺肝を碎きて、奸策を廻らし、頭腦を惱めて、奇計を蓄はへ、彼の君侯の股肱を切り斷ち、君侯の羽翼を殺ぎ落して、近習も皆邪臣が心腹の人のみと、成り濟したる時節を待得て、窃に君侯を誘ひ、隱密の處に誑かし入れて、或は弑殺し、或は鴆殺して、外面は卒中頓死と相觸る、左右皆彼が心腹なるが故に、都て是を漏泄せず、國中獨も此暴逆

を知る者なし、若し彼の君侯の鳳孫龍子あれば、人に任せ委ね玉はざる事、寔に貴き聖慮ならずや、奏し願ひて家督を續がしむる眞似して、時を窺ひ列國の諸侯の幕下、譜代重恩の老臣、謹慎忠烈の て、密かに是を失ひ、己が子姪の間を引替へ、果諸賢は、互に懷を開き、志を合せ、五ヶ、七ヶ、して君の國祚を奪ふ、之を賊臣と云はんか、之を伴を定め黨を結びて、一紙の誓言を綴り、各ゝ血盜臣とせんか、憎みても憎むべきは佞臣の奸計なり、是皆庸君暗主は、至下の賢愚を察せず、邪正印を居え、互に誓て忠義の丹悃を抽んで、各ゝ心を分たず、己に諂らひ從ふ者を見ては、羽翼の賢佐を一にし、時々に忠諫を聳げ、毫釐も君に追從せなりと稱して、寵賞度に過ぎ、恩榮節を失し、譜ず、忠貞、賢明、老功の善士を擇び進め、常に君代重恩の忠臣義士、數多あれども、棄てたるが如の傍に在りて、聖經、賢典、王道の大義を講演せく、總に顧みず、果ては國務を佞士一人の心に任しめ、近侍の人々にも、聽受せしめ、苟にも、高せ、權勢を一人の手に歸せしめ、終に此災害を受談大笑、婬陋鄙俗の事を談ぜしめず、酒宴遊興の け、國を亂し、家を破り、身を亡し玉ふ事は、總に邪游を催さしめず、田獵鷹鷹の悪行を停止し、邪是れ彼の出頭人と稱せられにし佞臣の所爲なり、佞の盜臣をして、且らくも君の傍に近付かしめず、諍ひ諫めて、椒房の婢妾を減少して、無益の浮費天下往々に是あり、之に付ても、大樹神君慈悲を を停止すべし、恐るべし、一城一年の雜用は、皆萬の本として、五老を擇び定め、天下の政務を一是黎民の膏油なる事を、熟ゝ謂ふに、椒房は一人

有德の賢婦を居ゑ定めて、小婢兩三輩を相添へ、倒狂亂の至極なりと、呵責し玉へり、昏愚の人の隱侍せしめば、足れらくのみ、男女室に在るは、目には、不淨の妖色を見ては、春の花、秋の紅葉人の大倫なりといへば、必ず一婦ならくのみ、且よりも麗はしと悅び愛し、愛執の思淺からず、往又、父母は天地の如しといへば、天に二ッの天なく、地に二ッの地無けん、賢臣二君に仕へず、貞往に後無きを以て、不孝とす、と云へる古言を執女兩夫に見へざるを貴しとせば、賢夫も亦た兩婦へて、好き身方なりとして、我は妖色などを愛すを養はざらんか、近代は兩婦は扨置き、八婦、九る輩にはあらず、後なき不孝を恐るゝ者なりと云婦、十婦にしても、他足らせ玉はぬ諸侯も、往々ひて、多く兒女子の輩を集めて、晝夜に混交して、に是れある由、中々人間業とは見えず、是又不祥後有る孝行をはげみ勤めて、總に民間の窮困を顧の兆なり、必ず家を破り、國を失ひ、身を亡ぼし みず、果ては、勞咳虛損など云へる難治の重病を玉はんが故に、古人は美婦人を指して、蛾眉の斧發して、身を失ひ國を亡ぼす、豈後なき不孝のみと名づけ、忌み恐れ玉ひき、斧とは何ぞや、美色ならんや、家系も亦た斷絶するに至る、熟ゝ謂ふは人の正心正意を伐り斷ち、人の命根を殺ぎ縮む に、士庶人は知らず、上天子より諸侯に至るまて、る事、磨き立てたる斧鉞に過きたり、去る程に、民の父母たらんず人は、賢明仁恕の人を得て、萬民佛は是を不淨を以て淨とし、苦を以て樂とす、顚を附屬し、安撫せしむる事得ざるを、後なき不孝とするか、何が故ぞ、堯に丹朱あり、舜に商均あ

り、何れも後なきにあらず、然るに堯は舜を揚げて民を附し、舜は禹に附して、民を愛育せしむ、寔に知る、聖人は萬民を以て一子にも見かへさせ玉はざる事を、然らば即ち、聖賢豈に夫れ後なき不孝を恐るとて、多く婢妾の輩を集めて、財産を費し、國を弱まし、萬民を苦しめ玉ふ者ならむや、動もすれば、我は一國の君、一城の主なる者を、萬事心に任せざらめやは、とて恣に美女を貯へ、遊妓を集め、國衰へ、民疲れ、其身も亦た短壽にして得難き人身を空しく失ひ玉はんより、我は是一妻一夫にして歳月を送る底の、三家村裏貧弱無福の細民なるぞと覺悟し玉ひ、身を責め心を懲らし、萬事を省略し玉はゞ、一年には如何程の餘計なるべきや、夫を放ちて、萬民を憐み救ひ玉はゞ、飽くまで御壽命も長く、千歳の後までも、寔に賢明仁德の聖君なりしと、仰ぎ貴ばれ玉はむ事、如何計り目出度かるべき、返へす〳〵も、忌み恐れ玉ふべきは、向きに所謂蛾眉の斧なり、斯く云へばとて、閣下に斯かる惡癖おはして、其を爭ひ諫めんとにはあらず、此迷は、如何なる賢人君子も溺れ易く、落入り易き道なれば、預め無病を治する鍼灸なるぞと、覺悟し玉ふべし、此故に、氣を練り、精を養ひ、長壽を保たんと、勤め守る人々は、第一最初に此一件を禁止す、ましてや、國を守り、家を治め、黎民を愛育し玉はんず賢君は、第一に恐れ愼しみ玉ふべき一大事なり、次に願はくは、君臣ともに志を合せ、良策を廻らし、倉庾願くは七年の糧を貯へ、凶年饑歳には、黎民愁ひ苦しむ色ある時に、分ち與へて其窮困を賑はし、救ひ玉はゞ、上もなき仁德たるべし、云く、七年の糧は容易に貯へ積む事能はじ、其良策得て聞つべしや、云く、是れ俄に賦稅を重くし、收斂を烈しうして、民の財利を奪ひ、之を藏め貯るにあらず、驕奢を禁じ、費を制し、歳月を重ねて、民凍餒の時を待たば何の難き事か是あらむ、若又、君侯の左右、常隨侍の人々の其中に、出頭人と稱せられて、讒佞奸邪の聞えあらば、諸賢心を付けて、再三敎へ導き、其當否を考へ、虛實を察して、極て退け棄つべきを見は、智計を運らし、早く是を追退け、君臣ともに後難を遁れ玉ふべし、君のため、國家の爲め、人民の爲めにとならば、縱令武士に命じて、捉らへて誅戮し玉ひたりとも、諸君心を合せ玉はゞ、何の憚る處か是あらん、邪臣も亦た自ら顧み恐れて、早く前非を改むべし、人の臣として、君の國家を亂り、君を亡ぼし、君の系嗣を斷つ、豈臣たるの道ならむや、果は、自身も亦天誅に責められ、人禍にかゝりて、身の置處なきに至らむ、近くは、甲陽の長坂跡部が輩の如き、誡しむべきの前車なり、閣下も、亦た宜く自ら計りて、堯舜禹湯文武の君の、勤め行はせ玉ひたりし、仁恕の御政務、及び古今の明君聖主の芳躅を踏ませ玉ひて生民を安撫し玉ふべし、然らば、即ち天、君に賜ふに長壽を以てし、地、君に肇ぐるに爵祿を以てし、君臣ともに、永く天澤に浴して、兒孫次第に盛大ならん、若し又、日頃窃に心掛玉ひにたりし、隻手の聲を聞き、見性得悟の御望み、今以て棄てざらせ玉はゞ、猶々精神を勵まし、勤め進み玉ふべし、譬へば、此に行人ありて、大憤志を抽んで、隻手の聲を聞かんとならば、至善の工夫に越えたる事は是れあるべからず、至善と

は何をか云ふや、喜怒哀樂の未だ起らざる以前、惻隱羞惡の未だ兆さゝる始め、之を至善といふ、禪門には是を正念工夫と云ふ、君子百行の最上、佛道萬善萬行の樞要は至善なり、若人、正念工夫の精神を凝らし、至善に止る事を得んと欲して、勵み勤めんとならば、決烈勇猛の丹悃を抽んで、堅固精進の大丈夫に非るよりんば、輙く止り得る事能はじ、何が故ぞ、法盛んなれば、魔も亦た盛んなり、此時に當りて、平生の心意意情、頭を競て集ひ起り、波の如くに爭ひ湧く、此時恐怖を生せず、一人と萬人と戰ふが如く、牙關を咬定し、面皮を冷却して、烈しく進んで破らんとす、如何せん、根本無明の衆魔、轉攻むれば轉强き事を、三毒五欲の賊黨、雲の如くに爭ひ起り、十惡八邪の妖魅、風の如くに噴り吼ふ、千妖百怪心田を侵擾し、法

體を困勞す、心王乍ち戰負けて、戒定智慧の三軍も、戰疲れて起つ事を得ず、上下四維、皆是邪魔黑暗の世界となんぬ、萬德具足の心王も、身を隱すに處なし、實際理致の深林に入り、法界無碍の巖穴に潛んで、且く法體を隱さんとすれば、舊習習氣の微細の流注、忍び入りて火を放つ、苦集滅道の小道を踏んで、二乘小果の幽谷に彳み、粗弊垢膩の衣を着け、鹿苑草舍に唾らんとすれば、欲愛住地の家賊は、忍び走りて邪黨を引く、常樂我淨の寶殿は、貪嗔癡慢の猛火に燒かれ、進むに寂滅の貴階を失し、退くに生死の幽關を隔つ、其後度々進んでは破られ、破られては又進む、力を用うる事久しうして、一朝乍ち、王赫として斯に噴り、止觀圓頓の殘兵を驅り集め、平等無相の勞臣を勵げまし、諸法實相の大法をおし立てさせ、大圓鏡光の金甲を押戴き、珍御寶聚の袂を褰げ、金剛堅固の寶冑を打掛け、實相般若の利劍を帶し、三密瑜珈の油幕をかゝげ、六大四曼の軍營を離れ、不退圓成の長鎗を撚りて、無常迅速の駿馬を引立て、動靜不二の具鞍置かせ、斷惡修善の轡を合せ、善順柔和の白漚はませ、精進勇猛は先陣に擇まれ、四德具足は後陣をまとめ、左備は正念工夫の老臣、右備は純一無雜の勇將、上求下化の諸鐙、成所作智の諸將は、尸羅波羅密の蟻蔽つらね、初發心地の若者どもは、便成正覺の鞍馬に鞭ち、色空不二の兩將は、鶴翼魚鱗の備を守り、無二無三の雜兵は、諸相非相の腹卷引きしめ、阿耨菩提の大弓には理事無碍法界の鏑をはけ、四弘誓願のかい楯を雌羽に突き立て、一乘唯有の大白牛車には、法門無量の法財を駕し、諸惡莫作の群馬を驅りては、少欲知足の兵糧を馱し、四正勤の正兵は、利行同事の諸卒を率ゐ、平等性智の大路を進ませ、下化衆生の幽谷には、上求菩提の險處を隔てゝ、四神足の奇兵を伏せ置き、法喜禪悅の法螺を吹立て、寂滅爲樂の鐘撞き鳴らし、一勢〳〵隊伍を亂さず、攻め近づく、妙觀察智の物見の武士は、天眼童子を案內にて、放身捨命の險處を涉り、敵陣魔軍の城壘を、古谷隔てゝ遙に望めば、高抗人我の嶮山は、月日を遮りて高く聳え、十惡八邪の稠林は、臭穢を籠めて列り立ち、其麓には、八識田のあらやしきを、數千町切り開かせ、五蓋十纏の殿堂、門廡、閻羅大城の結構になぞらへ、夢幻空華の甍を並らべ、貪欲無慚の練塀つり塀、偏見見取の矢櫓を開かせ、廣劫無明の虛堀には、貪愛取着の愛河をせぎ入れ、充滿穢濁の毒よりは臭煙を

浮べ、毒霧をこめて滝へたり、驕慢邪見の幔幢は、顚倒四倒の外樣の面々、五邪命不淨の王膳を調和し、斷常二見の業風に吹き靡かせ、煩惱業苦の高橋、三毒五欲の大牢の美味、生死長夜の無明の酒盛り、無慚破戒の突く棒、さすまた、兩舌惡口の鉾、長刀、つばなの如く立て列らね、寸善尺魔の木戸、有爲住相の鈍根夜叉、亦有亦無、斷常外道、貪姪嫉妬の妖嬌妾婢、怨憎會苦の熱惱臭婆、分別思想逆もぎ、嗔恚のほむらの狼煙を燒き上げ、惡言誹謗の刁斗の聲、昼夜を分たず丁々たり、天眼童子には、小黠しく忍辱の袂を結んで、荷擔大法の肩に打掛け、善順柔和の裳を揭げ、八定四禪の盤陀石上に攀ぢ上り、事理圓融の眦を凝らし、遙に魔軍の並居たる堂上堂下を見渡せば、中央には根本無明、業識大王、賴耶含藏の玉座を構へ、想行識の龍衣の袂をかひつくろひ、サモ憎〳〵しく坐してあり、左は業轉三細太子、末那七識の傳奏大臣、諂佞聚斂の宰相國、右の方には計名執取の六識將軍憎愛嫉妬は副將たり、殺生邪婬の近習の奸臣、八識の雷鼓を吹きかけ、鑊湯爐炭の洋銅を練り上げ、七狂亂、八顚倒、破戒無慚の狂遊は、夜を日に繼いて飽き足らず、斯かる處へ、官軍は奇兵正兵、軍令正しく、次第〳〵に攻め近づき、魔軍の陣處を七重八重、大疑の矢叫び、話頭の凱歌、純一の貝鐘つき立て、もみにもんで、攻めかゝれば、魔軍は、大に驚き嗔りて、百千瞋恚の毒鼓を打ち、木戸さかもぎ押開き、入り亂れては、立合うたり、鶴翼はきびしく圍めば、魚鱗は瞋りて烈しく衝く、兩陣互ひに軀命を惜まず、危亡を見ず、毒戰數日を重ねければ、猛き心も力も弱わり技盡き詞窮りて理も亦窮る所に、不思議や、俄に空かき曇り、一村の雲落ち棚て、敵も味方も眞ッしぐら、常夜の暗路、黑暗獄、兩陣互に仰天して、正氣を失ひ東西辨ぜず、電光いなづま只射違ふる箭の如く、呆れ果てたる處に、天も崩るゝ大雷一聲、地軸も碎け裂くるが如し、敵も味方も、膽魂を驚落し、大死一番喪身失命、能見もなく、所見もなし、此時、行者絶後に再び蘇り、圓解乍ち煥發して、手を拍して呵々大笑、目出度や、貴とや、有難や、夢なりけりな、嬉しさよ、生死涅槃猶如昨夢、天地一指、萬物一馬、日頃尋ねし隻手の聲は、目前に昭々として心上に煥爛たり、山形の柱杖子を拗折して、從來天地黑漫々、是を大圓鏡智といふ、人間天上の善果、何事か是に過ぎたるもの有るべき、皆是多年霜辛し、雪苦し、長坐し、不臥し、工夫相續、疑心凝結、軀命を惜まず、精彩を著け盡したる、功勳なりと、法喜禪悅踏舞を忘る、行者往々に此處を以て、法成就に到れりとし、諸佛頂上の禪なりと稱して、諸方を罵詈し、佛祖を併呑し、此外更に衆生の度すべきなく、禪の參すべきなしと云て、高談大口す、殊に知らず、此は是れ、二乘小果の所證にも及ばざる事を、是を未證謂證、未得爲得、增上慢の人とす、末代の悲しさは、此黨麻の如く粟に似たる事を、殊に知らず、有餘小果の深坑相似涅槃の陷阱なる事を、眞正の禪流の如きは、即ち然らず、猶々進んで退かず、諸法實相の正觀、寶鏡三昧の眞修、昼夜に勤めはげむときは、早晩明暗雙々理事不二、空手にして鋤頭を把り、長河を攪して蘇酪となす底の大事は、次第に了々分明

なり、是を平等性智と云ふ、此時少しも足れりとせず、尋常の誓願輪に鞭うち、上求下化の精錬を重ね、此故に古人云く、平地上に死人無數、荊棘林を透得する者は是好手と往々に、此平等無相の荊棘窠裡に陷墜して、進む事を得ず、退く事も得ず、恰も病鳥の籠裏に睡るに似たり、夢にも曾て第二重の荊棘叢ある事を知らず、何をか二重の棘叢と云ふ、踈山の蕣塔、牛窓橋、鹽官の扇子、乾峰の三種、是等の大事を了畢すれば、智眼次第に明明にして、能く人の利鈍を辨じ、賢愚を見る、是を妙觀察智と云ふ、是より菩薩の威儀を學んで、臂に奪命の神符を掛け、口に法嚴の爪牙を咬み鳴らして、往來諸方の雲水を毒害し、大法幢を立て、大法施を行ひて、普く一切衆生を利益し、佛祖の深恩に報答す、是を成所作智と云ふ、虛空は盡くる事ありとも、我が願は盡る事無けん、是眞正の禪流、當家の種草にして、貴ぶべし、即頓菩薩の大行なる事を、豈夫れ今時小をも得ずして足れりとして、厚面皮を張り、高廣座を設け、眞正向上の禪なりと稱して、鴉も亦願みざる底の、臭穢の狐涎を吐き散らして、顯伶の酒子を敎壞し、諸方を誑惑し、人家の男女を魔魅する底の、白盲青瞽の輩、賤賣賤買の族の、夢にも曾て知れる處にしあらむや、畢竟如何、聖主は賢を愛し、暗主は佞を愛す、何が故ぞ、天將に雨ふらんとする時は、山色必近く、國將に亡びんとする時は、民間先苦しむ、

夜船閑話卷之下 終

於仁安佐美

沙羅樹下白隱老衲稽首作禮上

書淨藏淨眼二大士兩宮簾下近

侍之左右

（草稿）

過し頃は、不慮に簾下に趨謁し上りて、民間の俚語、叶はぬ辯口を張り、經に錄に、數度の評唱、片腹痛く思さんも、恐入り侍りにたるに、左もおはさで、結句取るべき所ありて、養生の一助とも なれりと、卑棄し玉はざりつる御事、愚老が身にとりて、生涯の歡踊、之に過ぐべからず覺え侍り、罷下候刻みも、御暇乞として、餘所ながら推參致すべきかと、幾度も思ひ立侍りたれども、老來涙脆く、見苦しき風情を人々の見參に入れ奉らんも、愧ぢがましく、態とひそかに罷り下り侍りき、路すがらも、歸着の今も、何とぞ御不例增さ御快氣まし〳〵て、甲斐〳〵しく、菩薩の威儀を學ばせ玉ひ、佛國土の因緣をも成就せさせ玉へかしと、祈る計りに侍り。貴とぶ所は、御連枝とも に、宿の靈骨厚くわたらせ玉ひ、御智德も優かに、求法の御志も厚くおはして、近習常隨の尼僧上藺達まで、萬事しめやかに、殊勝に見請け奉りたればこそ、御養生の一助ともなれかし、御氣力をも扶け奉れがしと、叶はぬ智力を抽んでゝ、數ならぬ繰言も、繰返へし〳〵尊聽を汚し奉りしなれ。左もおはさで、世の並み〳〵の尼法師の如く、無智昏愚の風情におはさば、七旬に近く世間に望みなき木の端の、何んの追從にか、召され候ふ度に、罷り上り侍るべきや、返へす〳〵も、隨喜し上るは、文字般若の力おはして、經に錄に、尋常熟覽

於仁安佐美

せさせ玉ふ御事、上求菩提の助には、是に過ぎたる勝行は侍るべからず。さる程に、彌陀經にも、大乘讀誦の人を、上品上生の機とす、とぞ說き置かせ玉ひぬ。三世古今の間に、見性せざる佛祖なく、一文不知の賢聖は半箇も亦たなき事に侍り。悲む所は、澆季末代の習ひ、然るべき先達なく、甲斐〳〵しき法友のおはさぬこそ、御殘り多く覺え侍るなれ。近年以來、禪苑荒れすさみ、眞風墮ち衰へて、諸方の叢林、諸方の宗匠達の、沙汰し申さるゝを見聞はべるに、往々に、化城相似の涅槃を捉らへて、自己本有の佛性なりと相心得、焦芽敗種の修證をとらへて、禪門向上の眞修とす。殊に知らず、此は是れ二乘小果の部屬なる事を。二乘とは、所謂聲聞乘緣覺乘これなり。聲聞乘の人は、如來の無念無作、非修非證、是を名づけて無上正覺とす、と說き玉へるを聞ては、心源湛寂の處を死執して、强て勤めて、想念を剝落し、識情を滅盡して、無心の田地に到らんとす、是を默照邪禪、死猫懶の類といふ。三四十年精練刻苦して、楷摩淨盡すといへども、終日の無念を求めて、終日の無作を行して、終日の有作を打し、終日の無念を求めて、終日の有念を行ず。果ては、氣盡き志疲れて、想念轉〻熾盛なり。此こに於て、從前の志業を打棄て、專唱稱名して極樂に往生せんとす。大明の末、此黨大に起る、萬曆の頃ほひ、晩年の僧雲棲の珠宏といふ者あり、四十にして出家、少しく文字を解す、小智に誇り小見を恃みて、眞正の宗師に參せず、見性眼暗く參玄力乏し、進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐れあり、此こに於て、名は禪門に在りて、內には專ら稱名念佛して、淨刹の往生を願ふ、彌陀經の疏鈔、竹窓隨筆等を作りて以て主張し、同巢窟の老禿、鼓山の元賢永覺といふ者あり、淨慈要語を作り以て助く。其言葉に曰く、見性入理の法門は、惡見狂解の恐れあり、稱名至誠の淨業は、往生九品の賴みありと。茲こに於て、四海の禪流水の低きに就くがごし、恐るべし、禪一變して既に淨に入る、淨一變せば將た夫れ何んにか入らんや。大凡番々出世の如來、世間に出現し玉ふ事は、一切衆生に佛智見道の眼を開かしめんが爲なり、と法華經の金文分明なり。さる程に、西四七、東二三、南岳、青源、馬祖、石頭、百丈、黃檗、南泉、長沙、臨濟、興化、南院、風穴、首山、汾陽、石霜、楊岐、黃龍、眞淨、息耕、妙喜の諸老、破口にも往生淨土の事を說き玉ふを聞かず。其餘の傳燈、會元等の內、其頭角の賢聖、專唱稱名の事を傳ふるは、半箇も亦た無し。專ら見性透過の大事を以て至要とす。淨業如し佛道の大綱ならば、祖師只た二三行の書を漢土に送りて足れらくのみ、曰く、專唱稱名して極樂に往生せよと、豈十萬里の波濤を凌いて此の見性の法を傳へんや。吾が日域二十四番の諸老、何んの求むる處ありてか、軀命を萬里の鯨海に拋ち、許多の艱辛を喫して此の透關の大事を傳ふる事をせん。斯く云へばとて、淨業專修の宗趣を蔑し譏るにし侍らず。元賢上座身は禪門に在りて、參禪害あり稱名益ありなど、說く底の贋緇は糺明せずんばあるべからず。悲い哉、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衞震ふ、其餘波流れて扶桑に入り、吾が東海日多の種族、大半此の流類に入る。近年處々一流の禪徒あり、彼れ又少しく異にして大に同じ、總

於仁安佐美

に是れ、最初鹵莽にして痛快に打發せず、見道分明ならざる故に、死に至るまで安堵の眉を開くこと能はず。常に其部屬に敎へて曰く、只其儘なるが好きぞ、學文して何にかせん、悟り求めて何んの用ぞ、「山賤の白木の合子、其儘に漆付けねばはげ色もなし」と云つて、徒に日々目を閉ぢ、頭を低れて、坐し、ひた睡りに眠りて妄念を掃除せんとす。如何んがせん、元是頑鈍無明の臭袋子、死に至るまで半點の光輝も亦た得る事能はず、只居ながらにして亡びんを待つのみ、逝世出家の人は云ふに及ばず、士大夫の人々も、道業親切なるほど、心氣次第に虛損して、虱糞の落つるを聞きても、心肝裂くるが如く、終に自盜の二汗を引出して、百藥驗しなく、衆醫手を束ねて、命根も亦た保ち難きに至る。自家の進趣を錯る事は、さしおいて論ぜず、他後法幢を建て宗旨を立て、三百五百の燕頷虎頭を喝走して、天下の蔭凉樹ともなるべき底の、英伶の衲子を提らへて、強て拗へて、八識頼耶の暗窟を死守せしめ、一生無智、頑賤擬議、不來底の鈍漢にしなして、月を重ねて千鍛し、歳を積んで百錬すと雖も、虫の氣息も得る事能はず、次第に志倦み、躰疲れて、疝癖塊痛、五積六聚、多少の病苦を一身に集め載せたる底の、生れも付かぬ重病の廢人になりて、人を見る時は恐れすくみて、應對も亦する事能はず、胸膈は常に水磨の砻くが如く、はては扁倉も亦た眉を皺め、華陀も手を下す事能はざる底の、必死難治の重症とならむ。悲しむべし、佛道を成就する事能はざるのみにあらず、世路も亦廢す、偏へに是れ見もせぬ見性の法理を、見たりげに說きちらし、得もせぬ佛法の奥義を、得たりげに敎へたてする底の、無眼の智識の敎化に依れり。此等の輩を見て、志を退く底往々に之れ有り、佛法人を得ざる事亦た宜ならずや。此こに於て、眞風土を拂つて盡き、禪苑根に透つてすたる、悉く是れ最初眞正の導師に見えず、諸方婆禪の涎唾を舐りて、頼耶業識の暗窟を認め得て、禪道佛法なりと强爲し、賊を認めて子となす底の、相似の禪徒のなれの果なり、古へ石霜の諸禪師のごときは、常に參徒に垂語して曰く、一念萬年にし去れ、一條白練にし去れ、古廟裏の香爐にし去れと。終に千衆を坐枯して、千僧の墳廟を列らぬ、寔に惜しむべし。夫良禽は樹を擇んで栖み、貞臣は主を擇んで扶く。衲子も亦た須らく行脚の眼を具し、明師を擇んで始めて得べし。大凡參玄の士は、千里を遠しとせず、叢社の内に入りて頭を聚め眉を結ぶ事は、大事因緣を了畢し、荆棘林を透過し、臂に奪命の神符をかけ、大に人を利して以て佛恩を報ぜんとす。彼も亦た人の子なり、豈に彼の師長父母、軀命を損ぜんが爲に儞を放ちて行脚せしめんや。或は又一般あり、種性聰利にして、鹿苑草舍の所說をとらず、相似涅槃の敎を受けず、或は自己に就いて參譯し、佛祖の語話を疑着し、或は飛華落葉を觀じて忽然として漆桶を打破り了りて、大に歡喜し、大に踊躍し、佛祖を併呑し、諸方を罵詈し、燈籠躍りて露柱に入り、佛殿走つて山門を出づ、人は橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず、何んの難き事か之あらん、華嚴の四種の法界、法華の唯有一乘、今掌上を見るが如し、其餘の傳燈千七百個の秘訣、一揑を消するに足らず、大安樂大解脫、度

於仁安佐美

すべき衆生なければ度せらる衆生なし、生死涅槃猶如昨夢、何をか捨て何をか求めんと、徒だに日々高談濶論、永く菩提の資糧を失し、永く涅拌の正因を破し、覺えず黑暗小果の深坑に陷墜し、湛寂死水の空溝に沉溺して、自ら得たりとし、自ら足れりとす。殊に知らず、祖庭は遙に天涯を隔つる事を、夢にも曾て法窟の爪牙ある事を知らんや。此の寂滅の惡處に墮すれば、上下も亦た寂滅無相、四維も亦た寂滅無相、此等の輩を見泥地獄の衆生と言ふ、蚯蚓の深泥の底に潛伏して、一塵も亦た見る事得ず、首も亦た動かす事得ざるが如し。昔し蕊窟摩羅、舍利弗を指して呵して曰く、爾が智惠は蚯蚓の如しと、夫れ是れ之を特覺自了、小果の辟支佛とす、寔に恐るべきの重癖なり。詔陽老人、一生人の爲めに拔却する底の釘楔なり。其本根を拔かんと欲せば、須らく難透難解、難信難入底の話頭に參して、見泥を洗滌すべし。見地透脫せざるときは、終に恐怖の心疾を發す。話頭とは何をか言ふや、南泉遷化の話、疎山燾塔の因緣、乾峰三種の病、五祖牛窓橋の話、鹽官犀牛の扇子、翠岩夏末の示衆等是なり。中に就いて、士大夫の人々は、農工商の輩とは大に異なり、尋常精鋭の神機を養ひ、王位を守護し、天下の民を安んずるの美器、誓つて王佐の才を抽んで、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にせんとす、安からざるの大任なり。然るを後世助からんとて、輕々しく相似の禪徒に魔魅せられて、此こに潛み、彼しこにかくれて、辨道工夫なりとて、徒たに日々屈まり眠むりて、魂不散底の死人の如し、若夫れ天下の大事あらんに、何んの氣力ありてか、一支へもさゝふる事を得んや、火砲は潮の如く打ちかけ、凱歌は雷霆の群り落つるが如くならん時、具足打ちかくる事は、存じもよらず、弓矢とる事さへ叶はで、日頃親しく睦しかりし君臣父子の人々は、湯とならんも水とならんも、顧る事も打ち忘れて、はだせなる馬に這ひ乘り、當て處もなく遁げ走りて、命ばかりを生きんとす、千日養はれて一朝の急を守るは、武士の習なるものを、一朝の專途をはづして、幾重の面皮ありてか、他時後日、親戚朋友の前に顏さし出だす事を得んや。是れ皆日頃の枯坐默照のなす處なり、士大夫の人々に限らず、農は犂鋤を拋ちて枯坐默照し、工は斧斤を拋ちて枯坐默照せば、家衰へ民悴けて、國夫れ危ふからん乎。人將た言はん、士卒の鋭氣を折じき、國家の武威を弱はます、禪は果して不祥の大兆なりと。然らば則ち、佛道の光輝を味まし、禪門の樞要を破するものは、閻縮の輩に越えたるはなし。夫金を僞り作る者は、其罪三族を赤うす。禪を僞り說く者は其罪誰にか歸せんや。

承應の頃ほひ、美濃の國蜂屋といへる處に文叔長老といふ者あり。一旦の悟解了智を恃んで、乍ち斷無の惡見を生じて、大に人家を敎壞し、天堂なく地獄なく、生死なく涅槃なしと稱して、因果を撥無し、佛像を輕賤し、經卷を破壞し、神社を沒倒し、墳墓を發き、五常も亦亂る。時に蜂屋悟りと稱して、人皆恐ぢ畏る。明曆丙申の夏、其近隣三四個の村里、疫癘大に入る。叔が說を信じ、叔が敎を受くるもの盡く疫鬼の爲めに獲らる。文叔大に恐れて、遁げて武陵に行かんとす。伴縮七八輩を卒して、雷雨を衝いて行く、路太田の渡に近

於仁安低美

くして、四面眞暗にして黑漆桶裏に入るが如し、電光は潮の打ちかくるが如く、迅雷は天の崩れ落つるに似たり、時に牛鬼の如き者出て來り、怒りうめきて叔を㨿みて行く、伴侶皆倒れ、生氣を失して立つことを得ず、人見て謂へらく、盡く皆死せりと、且らくありて雷止み、天晴れて後昔く叔が所在を求るに得ず、堤上空しく只た一臂を落すを見ると。寔に恐るべし、見道の聖者却て妻子を帶ぶとは、此等の部類をいへり。大圓國師の年譜幷に正三の法語、及び鄉黨父老の口碑にのす。古へ慈明、眞淨、息耕、妙喜の諸老齒を切りて抵擺し、拳を握りて攘斥すといへども、本根を盡くす事能はず。當時禪學に心を盡くしゝ士大夫は、打頭に傑烈勇猛の憤志を震つて、無明の暗窟を劈破し、生死の業根を踏斷して、正しく一回拋身捨命し了りて、再び慈明眞淨等の惡毒の爐鞴に入り、參天の荆棘を拔却し、禪海の波瀾を併呑し、大用大機活達脫洒、生死の恐るべきなければ涅槃の求むべきなし、百萬亂軍の場に入るといへども人なき處に立つが如し。百騎を放ちて千騎に對すといへども惡虎の跋兔を打つが如し。天下を泰山の安きに置く、全身一片の眞元氣、肚裏十分の忠膽義腸、機に應じ節に當りて、能く仁に能く義に、能く禮に能く信なり、而して後に、菩薩の威儀を學び、佛國土の因緣を成就す、之れ古人參學の樣子なり。熟〻流轉常沒の衆生死彼生此の有樣を觀ずるに、鎭なへに無間焦熱の惡趣に墮し、餓鬼飢饉の難處に沈み、畜生無智の暗區に迷ひ、修羅刀杖の苦患を受け、紅蓮の池あり劒樹の山あり、黑繩衆合、叫喚大叫喚の巷に往來して、際限もなき苦患を受け、肉抹骨磨の災厄に罹りて、偶〻人界に出頭するも、貧窮下賤の家に生れ、豺狼牛豕の心を恣にし、放逸無慚慾りも無く、再び三途の舊里に歸り、或は善智識の敎化に隨ひ、或は善友の誘引に依りて、來生ある事を信じ、如何なる淨土にか生じ、如何なる佛にかならんと、持戒し持齋し、六時行道し、長坐不臥し、誦經し諷咒し、難行し苦行し、身臂指を鍊り、多拜し多禮して成佛を求むる底の人々、多くは長者居士、宰官婆羅門、大名高家等の富貴自在の家に生れて、成佛を遂ぐる等の望は多くは打ちはづす事なり。何んが故ぞ、夫れ成佛作祖底の大事は、疑團打破開佛知見道の一刹那にあり。見性悟道せずして、成佛を遂ぐる事は馬蛭の口に白象牙を生じ、石女の腹より黑牸牛を產し、鷄鶏口を張りて嘉州の大像を含み去り、蚊虻砦を鳴らして陜夫の鐵牛を啄破したりとも、成佛は存じも寄らざる者なり。大覺調御の如きは、娑婆往來八千度を經させ玉ひにたれども、流轉生死の衆生に少しもたがはせ玉はず、末後雪山に入りて開佛智見を得させ玉ひてこそ、初て正覺を唱へさせ玉ひしなれ。此故に達磨大師曰く、若し人佛道を成ぜんと欲せば、先づ須らく見性すべしと。見性の眼なく四弘の願行に依らずんば、縱令六度萬行あらゆる善事を行じたりとも、人間にては福德尊貴大名高家の家に生れ、天上にては四王忉利、夜摩他化等の天に生ずるより外生ずべきの淨土なく、成ずべきの佛なし、忽然蘇息見道得力の當位を來迎といふ、前後際斷疑團打破の端的を往生といふ、此外別に佛を求めば、木に就いて魚を求むるが如し、專唱稱名淨業不退の人

人も、唱へ〳〵て一心不亂の曉に到りて、初て決定往生の安堵は究め得る事に侍り。蓮如上人の平生往生、不來迎の往生と書かれたるも、此中を出でず。此故に知る、今生の尊貴高位福貴自在の人人は、盡く是れ前生の難行苦修信心堅固の後世者なる事を。三塗に沈む族より遙に勝るに似たりといへども、富貴に誇り尊貴を恃んで、あらぬ樣なる惡行を重ねて、來世は必ず惡種に墮す。熟〻願ふに、見性の眼なうして亂りに成佛を勸め玉ふ人々は、畢竟三塗の媒なるべし、癡福は三世の寃とは不易の金言ならずや。縱ひ一旦見性得悟の力ありとも、四弘の行願に依らずんば菩薩の威儀にもはづれ、特覺小果の深坑に沈んで法成就には到り難かるべし。昔より世人の口碑に、南山の道宣律師は、鎌倉の將軍實朝の卿に生れ、讃州の太守元英公は、法然上人の後身、尾州の太守元啓公は、前生は貴とき上人、右大將頼朝の前身は頼朝坊といへる貴とき廻國のひじり、五祖の成公は、東坡居士の前身、雲門大師と潙山和尚は宿昔靈山會上の衆數なりしかども、三度國王と生れて通力を失ひ玉ひける山。然らば則ち少しばかりの悟解了智ありとも、以て足れりとする事なかれ。眞正の導師に見えて、早く菩提心を求め玉ふべし。彼の上人も律師も、開佛智見道の眼正しくおはさば、讃州も相州も、直に是れ七種寶樹の佛國土なるべし。豈に穢土を離れて淨土を求め玉はんや、賢聖智者の內證は凡下の計り知るべきにあらず、昔笠置の解脫上人常に螢雪の窓に心を凝らし玉ひけるに、或夜深更に及んで外面何にとなく騷々しかりければ、窓紙に指して差し覗き玉ひけるに、恐ろしき異形の者ども夥しく來り聚り、其庵室を圍み遶るを見る、鐵爪金牙、鵶眼象鼻、僧形なるあり、鬼形なるあり、互に相麾み相啄んで、叫喚怒號す、其苦患地獄の衆生の如し、一老僧あり、香色の衣に水晶の珠數を爪繰り、鳩の杖にすがり飄然として來り告げて曰く、此等の輩は盡く是れ拘要尊佛の時よりの智者高僧なるぞ、智德ありとも菩提心なきは皆此の惡趣に入りたるぞ、和僧も學問の功はおはせど、菩提心おはさぬ故に迎へ行きて此道に引入れんとて、來り集りたれども、少しき慈悲心おはして未學の後輩を憐み玉ふ故に、捗々しく取り得る事は叶はぬぞよ、然れども終には引き落され玉ふべきぞ、相構へて油斷は仕玉ひそ、維摩法華等の大意を汲んで、早く菩提心に基き玉ひてよ、とて雲霧の冲ひる如く消え失せ玉ひけるよし。

憶ふに後世願はん人々は、唯眞正の要路を求めて、先づ須らく見性すべし、世に羨ましからぬ者は權勢富貴の人の上なるべし、過去には千辛萬苦を經盡くし、持戒し誦經し、禮拜恭敬したりし功德によりて、大饒富貴の家に生れながら、如何なる宿世の善因によりて斯くは生れたりけるぞと、考ふる心は少しもなくて、富貴を恃み權勢に誇りて、猥りに人を輕賤し妄りに自ら尊大にして、人を見る事は土塊の如く、人を殺す事は蒭狗を割くが如く、寢ぬる時は許多の婢妾を前後に隨へ、食する時は多少の物命を左右に列ねず、上もなき奢を極めもて行く故に、次第に萬事足らぬ風情になりて、民を貪り收斂を恣まゝにし、初春より耕し早苗し、一子の如く守りそだてたる稼苗の、風に破られ水に傷はれて、田面は宛ながら荒野か原になりて、

於仁安佐美

五町尋ねても三町探しても、稲粒一粒をだに得ざれば、妻子の顔を打守りて、最早事窮りたるぞ、有るべき儘に刈り得てだに、暮らし難き月日を、何を力に儞等が命をつぐべきぞ、果は飢ゑ渇えて、諸共に道路に倒れ死するより外は、せん方こそなけれと、妻子と共に泣き苦しむ處へ、黒吏の輩六七人、悪虎の目を張り、毒狼の牙を鳴らして叫んで曰く、御上よりの仰せなるぞ、田はあれても、稲粒はくさりても、賦税は一粒も容赦は叫はぬ事なるぞ、家財を賣りても、犂鋤を代なしても、喉をしめても、眼を抉りても、泣いても笑つても、妻子を質に入れても、殘らず上納せよ、さもなき時は、手枷を打つても首械をはめても、木馬に騎せても、水牢に入れても、皆濟せざればいつまでも御免はなきぞと、叫び立つれば、伏し沈むより外は爲ん方こそ無けれ。其後の苦患は筆も及ぶべき事かは、前生多少の艱難を窮め盡くして、萬善を行じ菩提を求めて、其功勳に依つて今生は富貴自在の身に生れて、過去の善業は露に埃に忘れ果て、美女を貯へ雅樂を張り、一身の驕奢を窮めて多少の人を泣き苦しましむ、來生三途の受苦身を置く處なけん、又有底は鹿狩鷹狩と稱して、朝夕農業に寸暇も得ざる細民を驅り催し、武士何十騎歩卒何千個、具鎧を鳴らし火砲を飛ばして、山岳も崩るゝ計り草木を分けて、喚き叫んで驅り立つる程に、麋鹿猿猪、狐兎狸狢、命限りに遁げ迷ふ底さながら叫喚衆合、阿鼻泥梨の有樣もかくこそと思ひやらるゝ計り、恐ろしき苦患を喜び勇むは、如何なる心ぞや、其身計りの罪業かは、多くの人人にも思ひもよらざる殺業を被らせ、諸共に悪趣

に落入る事、皆是れ來世ある事を知らず、淺ましき無智愚蒙の族の樂しみとする處なり。左なきだに、殺生を好む人は子孫必ず斷え果つる習なりと、双紙の記する處、現前の見聞く處少しも違なきものを、多くの物の命を取りて自らも命永く、子孫も命長からんとは、西へ行く人の東へ向つて歩むが如し。義家の卿は武運を養ふの勇士は、物の命は妄りに取らぬ者なるぞとて、尋常虫螻迄もむざとは殺し給はざりける由、さる程に武運も強くおはしけるにや、目に餘りたる奥州の朝敵を安々と征伐せさせ玉ひ、至尊の宸襟を安め奉り、美名を今の世に播し、古今無双の名將と稱せられ玉ふ。當代も宿世の善因を忘れ果て玉はず、仁德あつくおはして一身の驕奢を省き、四民の艱難を願み、衆庶を憐み、鰥寡を悲み、後の世の御營みも淺からぬ國主も問々有之由、盡きせぬさきの世の善業力なるべし。國脈の健康枝葉の繁榮までも推し量られて賞とくこそ覺え侍れ。此等の趣は出家遁世の御身に詮なき事に思ぼさんも如何はしけれども、法門無量誓願學と申す事の侍れば、彼方此方と考へ合はさせ玉ひ、道情をも助け增し奉れがし、又た之をついでに世上の人々の菩提心の根ざしにもなれかしと、心に浮ぶ事ども書付け參らせたるに侍り。迚も捨て果てさせ玉ふ出家遁世の御身に渡らせ玉へば、夏冬の御裝束につけても朝な夕なの供御等につけても、萬事輕く假令ひ八珍を御前にささげて陳らねたりとも、其の中御心に叶はせ玉ふ一品をのみ取上げさせ玉ひ、願はくは麻の御衣に綿布の御小袖にて、萬事質素に取り行はせ玉ひ、宿世の善果をも取り失はせ玉はず、來生菩提の資

糧とも殘し貯へさせ玉へかしと、祈る計りに侍り。日如何んが人を辨ぜん、彼れ德を惜しまず住庵して御給仕の人々の一度の御膳に、五人六人宛立ち騷て何んの用をか成さんと、果して老僧の裳を褰げがせ玉ふもいと騷々しく、凡下の人の目には如何て、彼の菜葉を追ひ來るありけりと、古人傳を愼にも時めきわたりて、いみじく目出度き事に思はしみ玉ふ事斯くの如し。さる程に、百丈大師だにんめれど、佛の御敎には更々叶はせ玉ふ間敷かとも、作さゞれば一日食せずと、勵み勉めさせ玉ひ恐れ入り侍り、願はくは每日代る〳〵一人づゝに し者を、末代の出家などの他人の艱辛して、織り定め置かれ玉ひ、殘りの四人には誦經書寫、禮拜紡ぎたる衣服を惜しげもなく着重さね、他人の刻恭敬等の善事を勤めさせ玉はゞ、菩薩の威儀にも苦して種ゑ耕したる米穀を會釋も無く食ひ膨れ叶はせ玉ひ、下化衆生の御營みとも申さるべく侍て、蒙昧昏惑さながら病馬の立ちすくみたる底に れ、古人は往々に德を失ひ、冥利を損する事を恐て、辨道工夫なりとて、徒に日々そら眠りして、れ愼しみ玉ひき、古へ岩頭雪峰欽山三人、伴を結在家信心の男女に仰ぎ貴とばれんず、勿體なく空びて湘西より江南の方へ行脚せられけるに、溪水恐ろしき浮世の慣らはせに侍り。後の世の事どを涉りける時菜葉の流れ通るを見て、欽山曰く此は如何んが覺悟しけるやらんと、努々油斷せさせ奥に遁世住庵の人ありと覺ゆるぞ、尋ね訪はんと、玉ふべからず。特り籠下のみに限らせ玉はず、常岩頭目を瞋らして曰く、儞の智眼大に濁れり、他隨近侍の諸君までも、朝暮隨逐、進退揖讓の上に於て、片時も怠惰なく正念工夫、相續第一の行持の室に在りて坐亡なりとて、日々枯坐して氣竭き、なるぞと、勇猛の大信根を推立てもて、勵み勤め體勞れたるなるべし。醫家に所謂氣は民の如し、させ玉ふべし、最も修行者の恐れ愼しむべき禪病民衰ふるときんば國亡び、氣盡くるときんば人にて、束の間も物靜かなる所が心の底にも澄み渡死すと、信なる哉。豈夫れ徒に坐を以て坐とし、りて、面白き境界ぞと樂しみに思ぼす了簡さし起靜を以て靜とする者ならんや。古人は動用を以て らば、是は修行者の爲には禪味に耽着すとて、膠靜とし、四威儀を以て坐とす。近來さる老宿の許しき障碍の魔境なるぞと、早く抛擲着して每日一へ人來りて、法語又は墨跡など請ひ求むる者あれと砌りづゝ、じは〳〵と汗の出る程、御働きなさば、樂は苦の種、苦は樂の種、といへる六語を書るが殊の外なる養生にて、拔群定力を扶け增し、して與へられける由、其語鄙俗に似たりといへど身心堅固の方便にて侍り。地下の者の渡世の爲めも、當代の學者の爲には相應の靈劑なるべし。掃每日手足を痛め苦しむる輩に、頭痛痼氣、勞咳つ地勤行は叢林の舊規なるものを、斯く計りの叢林かべなど云へる病氣持ちたる者は更々なき事に侍に、歷々の尼僧達はおはしながら、掃地は下郎奴り。古へ孔門三千子の第一、德行には顏淵閔子騫僕にのみ任かせ置かせ玉はんは、舊規にもはづれ、と、許可せられ玉ひにたりき顏子などの、十九に德行にも違はせ玉はんか、昔の雲井の御住居にして髮白く、三十にして早世せられけるも、陋巷涉らせ玉はゞ、申上くるも筋なく、恐れ入りたる

事に侍れど、今更ら出家遁世の御身として、叢林に入らせ玉ひ、淨藏院裏の御丈室にてわたらせ玉へば、古人住職の古風を慕はせ玉ひ、動搖作務の定力を學ばせ玉ひ、身心も健康に、長壽を保たせ玉はん御養生の爲にならば苦しからず。もし相なるべき事に侍らば願はくは簾下を始め奉り、其外の尼僧達も、竹帚一本づゝめしづかせ玉ひ、六齋又は其あはひにも、御門の外までも御掃らひなされ、世間は兎もあれ角もあれ、毎日動き働き、大義に聞しきのが、淨藏院内一流の不斷坐禪なるぞと、規矩を御定めなされ、精彩を着けさせ玉はば、作務普請のうへ取りも直さず、自然に七炷八炷の坐禪に少しも違ひなき御覺えは、我知らず現前致すべく侍り。是れ古人眞正修錬の體裁にして、近代は廢れ果てたる芳躅に侍り、作務掃地等且らく御勤め、昼休みの間は厚く坐物を布き、玉案上に官香一縷を挾み、皆々を召し集め、圍み坐せしめ、扨此の文を高らかに御讀聞かせなされ、其間は正念工夫相續間斷ありやなしや、又聽受の人ありやなしやを一向に管せさせ玉はず、只是れ下化衆生の手習ひ、上求菩提の替古なるぞと思して、初の中は讀み惡くき者に侍れど、ひたよみに讀み慣れさせ玉ふ程、次第に御調子も高く、外より見聞き侍りても、堪へがたく貴とく相聞えて、上もなき法喜禪悅の樂み、如何なる佛事作善にも增さり、如何なる無遮の法施にも勝り、直に是れ好個一流の大禪定、次第に想念も盡き果て、いつしか動靜不二、明暗雙々底の大事に契はせ玉ひ、自然に智鑑高明識量寛大にして、彼の臨濟の所謂、一切處心異ならざる是を活祖と名付くる等の境界は、求めざるに現前して、心身健康生鐵鑄成す底の天下の蔭涼樹ともならせ玉はゝ、人間天上の善果も之に過ぎたる事は侍るべからず。返へす〳〵も、修行者は修行成熟せざらん限は、尋常枯淡を甘なひ、純素の樂み、一點驕奢の心を交へず、毫釐も勝他の心を容れず、若し夫れ佛國土の因緣、菩薩の威儀のためにならば、縱令ひ天下の大叢林を坐斷し、三萬二千の大衆ありて、梵釋並び列りたりとも、少しも屈せず、不朽の大願輪に鞭うち、無遮の大法會を展開し、塵沙劫を歷盡して曾て退轉せず、恒沙の衆生を利益して終に疲倦せず、之を眞正佛子といふ。昔京の御室と、高野の御室と御連枝にてわたらせ玉ひけるが、或時入洛せさせ玉ひ、京の御室に入御ならせまし、來し方行末の盡きぬ御物語に、扨も片田舍の住居は、萬事足らぬ事のみ多く、殊更所領も薄く侍るからに、心に任せたる覺えは少しも侍らで、思出もなき月日をばすご〳〵とのみ明かし暮らし侍り、と語り了らせ玉ひて、御目の中うる〳〵とかき曇りけるを見させ玉ひて、諸共に打ち悄れさせ玉ひけるが、京の御室の御仰せに、つく〳〵と思ひやり侍るに、多くの人々は、皆盡くすき好みてこそ、乏しき目にも、事足らぬ目にも逢はせ玉ふ事かと、覺え侍り、高野の御室の仰せに、此は御仰せとも覺えぬ事をうけ玉はる者哉、人心地あらんもの、誰れとて人の事足らぬを數奇好む者の侍るべきや、さればとよ、世上の有樣を見聞侍るに、乏きをすき好むにはあらねど、己が分を知れる人こそ見え侍らね、五人召し伴れてすむべき人をも、十人も召連れ、五人召し使ひてすむべき從者をも十人も召し抱へ、五尺にてすむ

べき事を、一丈にも取りはだて、徒歩にてもすむべき假初の物詣でにも、輿よ車よなどどよめきわたり、家居に付けても調度に付けても、美麗を好み負けじ劣らじと、人並〳〵にのゝめかせ玉はゞ、萬戸侯に封ぜられさせ玉ひたりとも、御心に充ち足らせ玉ふ事は、おはすまじきぞかし、現なる假の火宅の宿りなれば、純素を貴とび枯淡を樂しみ、萬事輕く數ならずげに渡らせ玉ひたりとも、普天の下王土にあらずといふ事なく、率土の濱王臣にあらずと云ふ事なし、と申し侍るからは、竹の園生の末葉なるものを、誰か、さげみし慢どり侍るべきや、況して世の中を思ひ絶ちたる出家遁世の人などの、時を得顔に似合ぬ綾羅絹布を賢しこげに引きそろへて着かざりたるは、戒律にもはづれ、罪深く淺ましき有樣に見ゆれど、我も人も名利の風には吹き敗かれ易く、口惜しく愧がましき風情に侍り。書寫の上人も、道念濃厚なれば世念輕微なり、世念濃厚なれば道念輕微なりと、申置かれし者を、誰々が身の上も、世念の濃厚に道念の輕微なるこそ、返〳〵す〳〵もうたてく侍れと、漏る方も無き御物語りに、高野の御室も感じ入らせ玉ひ、三敎の理に暗らからせ玉はで、漢和の才優かに渡らせ玉ふを、常々御羨ましく覺え上りにたるに、斯る世上の事まで賢くをさ〳〵しく渡らせ玉ふ御事よ、とて御衣の袖をしぼらせ玉ひしとか、寔に千載の美談といふべし。昔悉達太子は、五印度の主じ、淨飯大王の御子にておはしけれども、深く世の無常を恐れさせ玉ひ、十九歲にて耶輸多羅俱夷女等の美夫人達を見捨てさせ玉ひ、夜半に王宮を忍び出て仙人の奴とならせ玉ひ、あらぬさまなる艱辛を歷させ玉ひもし、皆是れ生死旋火の苦輪を恐れさせ玉ふ故ならずや。華山の法皇の如きは、無常の殺鬼は萬乘の君をも恐れ奉らぬ事を、かねて知ろしめされけるにや、十善帝位をふりすてさせ玉ひ、勿體なくも玉體を乞食法師の身にやつさせ玉ひ、那智熊野などいへる恐ろしき山路を、召しも習はぬ御草鞋に御足は切れ損じ、染めぬ草木も無かりけりなど、今の世までも語り傳ふ。中將姫の如きは、殿上にも殿下にも、比類もなく麗はしぎ御よそほひおはしければ、天子の中宮に進め立てまつらんとて、崇め貴ばれ玉ひしも、玉簾の中も火宅の外ならずと、泣〳〵夜半に忍び出て玉ひ、雲雀山に入り玉ひてより、堪へ難き艱苦を歷玉ひ、貧窮無福の身なれば盜賊の恐も無し、山中燈火なければ眞如の月を燈火とす、迷ふ則は十萬億土、悟る則は去此不遠と、口ずさみ玉ふ。眞如大德と申上るは親王にておはしゝが、自ら御飾を下ろさせ玉ひ、御求法の爲にとて渡唐せさせ玉ひしも、唐土には御心に叶ひたる知識なしとて、渡天遊ばされ、流沙といへる處にて身罷らせ玉ひけるよし。光明皇后と申上るは、聖武帝の御后にて、大智惠德相幷らび備はらせ玉ひけるが、菩薩の大行を思ひ立たせ玉ひ、無遮の施浴を行ひ、尊卑を擇ばず老幼を分たず、千人の垢を掻きて三寶に供養し奉らんとて、高廣嚴麗の浴室を構へ、水に薪に御手を下ろさせ玉ひ、湯女の姿に御身をやつし、脛高くかゝげ、玉の襷甲斐〳〵しく、少しも撓ませ玉ふ御氣色もなく、每日何十人宛の垢をかゝせ玉ひけるに、既に千人に滿たんとせし時、室內俄に腥ぐさき風吹來りて、何んとなく穢らはしく惡しき

臭しける程に、人々如何やと怪しみ見る處に癩病人の全身うみ潰えたるが、杖にすがりて、呻き〳〵よろぼひ來るなりけり。人々うるさがりて、一人も殘らず遁げ散りたりけるに、彼の病者會釋もなく、湯槽の内に這入り、且らく在りて、皴枯れたる躰にて垢をかき給ひてんや、斯く穢ましき、異例のものをば忌み嫌はせ玉ふ事にやと、高々とわめきければ、皇后頓がて出で向はせ玉ひ、無遮の大施なる者ぞ、如何にや儞とても忌み嫌ふ事の在るべきと、此こ彼しこ、阿もなく掻き洗はせ玉ひけるに、全身腫み爛れて膿血の流れ出る事ひきも切らず。病者の曰く、膿の痞へたまりて、堪へ難く痛み侍るに、處々吸ひ出したびてんやと、易き間の事なるぞとて、彼の臭氣の骨に透り、肝に銘じて堪へ難き臭穢を忍び堪らへて、殘らず吸ひ出ださせ玉ふ。難行とや云ふべき苦行とや申すべき、今の後世者達の其儘が好きぞ、立ちの儘木地の儘が好きぞとて、そら唾りする人々の及ぶべき事かは。斯くて皇后の仰せに、如何にかたるよ、光明子が癩瘡の膿血を吸ひ出しにきと、相構へて忘れても、人にばし語りぞと宣ひければ、病者もち〳〵と這起きて、皇后の御顏をつく〳〵と打目守りて、光明子よ相構へて忘れても、阿閦佛の血膿を吸出しにきと人にばし語り玉ひぞと、云ひも敢へず、阿閦如來紫磨黃金の飢、赫爍として大光明を放ち、異香室内に薫じわたり、雲霧などの如く次第に消え失せ玉ひければ、皇后も人々も、涕涙悲泣して、禮拜恭敬し玉ひけるとぞ。濃州廣見の如大和尚と申上るは、貴とき公卿の姫君なりけるが、後世助からんとて、賤の女に御身を寢させ玉

ひ、さる尼公に仕へ玉ひ水を汲ませ玉ふ時に、桶の底の脫却せるを見させ玉ひ、自家の桶底も亦た脫却して、飽くまで御得力の强くおはしけるにや、其後渡唐し玉ひけるに、唐の天子も甚た尊信し玉ひけるとぞ。鹽山の惠春比丘尼と申奉るは、貴とき高家の息女なるが、援隊和尚の法幢の高きを聞き及ばせ玉ひ、遙に甲陽に忍び行かせ玉ひ、剃度を請はせられけるに、御容の幷らびもなくあてやかに、麗はしくおわしければ、出家の許容なかりけるに、火箸を燒き赤めて、御顏に推じ當てさせられける時、血煙のくわッと上りけるに、「面てをば恨みてぞやく鹽の山尼の煙りと人やいふらん」と詠じ玉ひ、動もすれば名聞ぐるしき心さし起りて、胸中を攪き濁す事多し、かくては中々法理にかなふ事は、及びもなき事なるべしとて、寸絲かけず丸裸になりて、豆腐箱ひつさげ、油樽打ちかたげて、如何にも人立ち多かる市町を、無人の曠野を行く顏ばせにて、幾度も行き通ひ玉ひける由。謂つべし佛法中の大勇參學の精神なりと。今の人々の人情の、阿師老婆のやからの敎に隨ひ、名聞利養の中に在りて、新婦子の禪を學びて、安念を盡くさん無心にならんと、如何にも殊勝に愛らしき顏曲して、寂靜の處を擇んで狸の虛睡りして、寒灰枯木の如くならんとす。二乘敗種の灰心泯智の修行なり、氣力次第に衰へ疲れて、苟且の塵事にも胸塞り肌汗し、人の高聲すを聞ても股戰き膽震ふ、かくては中々下化衆生の作用は存じもよらず、上求菩提の望を遂げんとは及もなき事なり。かく言へばとて、菩提を求めん人々は、誰々もみな夜半になく〳〵走り出で玉へ、丸裸になりて豆

腐箱提げ玉へといふにはあず。總じて參玄の上士は、大丈夫の氣象ありて、勇猛精進活達脫洒の氣概なくては、骨に付き皮に粘じて、一生妄想の魔網を破る事能はず。さる程に、惠春比丘尼も次第に見地明白にして、拔隊も亦無き者に思ぼしけるが、相州山の寺の龍庵和尙の許へ行きて、法戰一場群を驚かし衆を動ず。萬里の小路中納言藤房卿の如きは、和漢の才優かに、王佐の德兼ね備はらせ玉ひ、後醍醐帝の左右に仕へて並らびも無き寵臣なりしが、世の無常を觀じ玉ひ、閻王豈に金魚を佩びものにする事を恐れんやと、呟きながら御髻を切りすて、忍び出て玉ひ行き方知れさせ玉はざりけるが、果して生死の命根を踏斷して、息耕五世の正燈を挑げ、授翁の宗弼禪師と稱せられ玉ふ。刈萱重氏は筑後筑前肥後肥前大隅薩摩六ヶ國の大將なりけるが、櫻の花の散りて盃に入りたるを見て、夢幻空華の理を觀じ、愛別離苦をも悟り了りて却て愛し、怨憎會苦をも悟り了りて却て憎むと、獨言して妻子をすて入道し、高野の山に入りて行ひすましき。四の黨の旗頭熊谷の庄司次郎直實と云ひし武士は、人々にも恐れられたる無雙の勇士なりけるが、一の谷の合戰に、源平の目を驚かす働して、敵味方の膽を冷やし、拔群の軍功を顯はしたりけれども、敦盛の最後を忘れかね、阿育が七寶も壽命を買ふ事なく、須達が十德も無常を免かるゝ事能はずと、言つて黑谷に入り、入道して蓮生坊と名乘り、目出度く行ひおほせたり。有爲轉變の火宅の巷に、夢幻空華の身を宿して、本の露末の雫にも劣りながら、萬戶の富も何にかせん。天下の三聖人と稱せられさせ玉ひたりし、延喜天曆の君だも、焦熱の煙に咽ばせ玉ひ「いふならく奈落の底に沈みては刹利も須陀もかはらざりけり」と詠じ玉ひて、衰龍の錦の御袂をしぼらせ玉ひたるを、簫が岩屋の日藏上人は、目のあたり拜し上りぬ。敏行朝臣は詩歌の達者にして、而も手迹うるはしくおはして、法華經四百部まで書寫し玉ひたれども、道心うすくおはしけるにや、惡趣に墮し玉ひて其苦患に堪へかね、紀の友則が許に來りて、救を請はれけるよし。唐の武宗の如きは、富四海の內を保ち、貴き事天下の人主たれども、冥土黃泉の巷に在りては、鐵梁の責を受く。秦の莊襄王の如きは、位萬乘の尊貴を踏み、雄威八蠻の夷狄の邦まで恐れ隨ひたりけれども、死して三塗の底に墮し、果てしもなき苦患を受け、千歲の後嵩岳の玄圭禪師の許に來りて、悲泣して救を請ふ。其臣白起は梟勇廉來も恐れ屈み、籌畧孫吳も畏ぢ戰のく程にて、當る處破らずといふ事なく、觸るゝ處碎かずといふ事なかりしかども、死して糞泥地獄の底に沈みて、永劫出離する事を得ず。梶原平三景時が如きは、右大將家の槌柄を掌にして、威武鎌倉の大小名を刧かしたりけれども、閻王の使に縛られ、死して餓鬼趣の中に墮して、飢渴の苦惱に堪へ兼ね、二百年の後七月水陸會の齋後、白馬に駕し來りて建長の勝藍に入りて施食を乞ふ。恐れても懼るべきは、阿鼻焦熱の受苦、厭ひても厭ふべきは穢惡充滿の娑婆なり。何つの別れか嬉しかるべきと、呟きながら立出てけるを、八歲になりける女子抱きすがりて、泣き留めければ、椽より下に突き落し、「世をすつる、すつる我身はすつるかは捨てぬ人をぞすつるとは

於仁安佐美

見ると」、詠じて泣く走り出でけるが、東は奥州出羽の果て西は筑紫博多の浦までも、殘る隈なく行ひすまし、今の世までも目出度き遁世の聖なりけるとて、木に刻み繪にかゝる、計り貴とまる、これな[illegible]面の武士佐藤憲清にて、後は西行と呼びなせる法師なり。此等の人々も目にもかへた、命にもかへじといとをしく、昵まじかりし妻子眷屬を芥の如く見捨て、出家遁世し玉ひける時は、油をもて煮られ、牛もて裂かるゝも物の數かは、如何斗り堪へ難く苦しくおはしつらんなれども、六趣の巷にさまよひ、三塗の底に泣き苦しまん事の淺猿しく恐ろしく、斯くは計らひ玉ひしならむ。此等の人々の佛道の爲に、受け盡し玉ひたる一日の艱辛刻苦は、今の人々の百日千日の勤も屆くべき事かは。永平の開祖も、行持あらん一日は貴とぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なりと、中置かれ侍り。行持とは何をか言ふや、上求菩提下化衆生の方便なるべし。或人の曰く、三塗の苦域を遁れ、六趣の輪轉を免れんとならば、見性得悟の一路に超えたる事はあるべからず、千辛を經盡くし萬苦を嘗め盡くして、六塵を忌み嫌はず、動靜を擇らびすてず、果して正念相續し疑團凝結して、忽然として一旦破家散宅の所望を遂ぐる則は、三千世界海中の漚、一切の賢聖電拂の如し。天地一指萬物一馬、度すべき衆生なければ說くべき一法なし。此故に華嚴に曰く、淨極の光り通達して、寂照虛空を含む、却り來つて世間を觀ずれば、猶ほ夢中の事の如しと、已に是れ夢中、何んの上求菩提とか說き、何んの下化衆生とか論ぜんと。予が曰く嗟々子來り進め、古

來は恁麼の所見の族を惡種空の輩との給ふ。往々に此の一旦の小智を得るときんば、自ら謂へらく、佛道の堂奥を極め禪海の源底を盡し、天堂の羨むべきなければ地獄の恐るべきなしと、いつて飲酒肉食婬房酒肆、飛廉も驚き恐れ、惡來も眉を皺はむる底の亂行惡作、さながら今時諸宗の法師原が、彌陀の力にて後世は助かるべきぞ、法華經の德に依りて、來世に恐るゝ事はなきぞと言つて、在家塵俗の人々だにも、恐れて作し得ざる底の、目に餘りたる惡行を行じて、袈裟をかけながら阿鼻焦熱の焰に咽ぶ輩に少しも違はず。地獄に入らざれば、必ず魔道に墮つ。小智は菩提の妨げと、此等の輩を云へり、寔に恐るべし、彼れ一旦の得悟はなきにしあらざれども、所謂初心の見道は、さながら閃電の拂ふが如くなる者にして、悟後の修行を假らざる時は、從前の舊習々氣、依然として盡くす事得ず、此を了事の凡夫といふ。此重病を救はん爲に、調御且らく下化衆生の方便を設けて、無緣の大慈を起し、一切衆生と共に種智を圓にせしむ、是を菩薩の威儀といふ。淨名經に云く、方便なきの惠は目ありて足なきが如し、惠なきの方便は足ありて目なきが如し。此等の古實に達せず、妄りに暫時の了解を恃んで、佛像を塊看し、聖敎を泥視す、此を未證謂證、未得爲得の衆生とす。去年の夏の頃なりき、むくつけき老女七八輩、予が室を叩いて告げて曰く、我々は、是より十里斗り北なる桂山といへる、人里もつゞかぬ山里の賤の女どもに侍り、不思議の事にて是迄は尋ね詣でたるになるが、慈悲と思して、我等が耳にも入らんずる御法を、一言なりとも示させ玉ひて、

永き闇路を照らさせ玉ひてよ、且又是なる老女が娘にて候者の、去年の冬より重病に罹りて、伏し沈み侍りにたるが、此五月半に、次第に弱く疲れて、事切れ侍りにたるに、胸のあたりの少しく暖かに侍れば、野邊の送も墓々しくせざりけるに、斯くて十日程も過ぎ行きけるに、一夜思はずも蘇息し起き來りて、息もつぎあへず打泣き〳〵物語しけるは、我は過し頃、怪しき人々に引立てられて、谷際の如くなる物すごき處を、十里計も行くよと覺えて、堪へがたく苦しかりしに、地獄とかやいへる恐ろしき世界を、彼方此方とへめぐりたるに、四面眞つくらにして、月日の光はなくて、無間焦熱の烈火の焰、どゝとも え上がる其中に、わゝと聞ゆるは罪人どもの責め惱やまされて泣きさけぶ聲なり。尊貴高位も乞食非人も、一所に追ひ籠められて、目もあてられぬ苦患を受く、中には見知りたる人々も間々之れ有り、又或る處には、出家沙門なども夥しく集り居て、苦患を受る處もあり。如何にや後世助からんとて、斯くなりたる人々の苦患は如何なる事にやと、尋ねにたれば、さればよ、無智にて少しも見性の智德なく、外持律の風情を現じ、高踏殊勝の僧形をかざりて、在家信心の男女を魔魅し、種々の供養を受け、或は不淨說法とて、勝他の爲にし利用の爲にして、妄りに佛法を賤賣し、乃至惡智惡覺とて斷滅空の見解に誇り、破戒無慚の族は云ふに及ばずと、教へ玉ひき。又見かすむ計り廣き野原に、餓鬼阿彌とかやいへる者なりとて、人の形にはあれども、黑く燻株の如くなる者の、痩せからびたるが、幾等ともなく苦しげに蹲まり居て、泣き悲しむあり、父母を孝養せず、乞食非人を憐れまず、慳貪の心深く、欲心のみ強くて、情もなく一生を送れる者どもの、なれの果なり。あの中には、大名高家も大福長者と云はれし者も、富貴高位の出家なども多かり、何百年にも水一滴飲む事さへ叶はで、飢ゑ渴ゑてのみあるに、剩さへ火の雨の時々ふりそゝぎて、遁げかくるべき所もなくて、わゝと泣き叫ぶあり。又古き木森の蔭のほのぐらく物凄き處に、古き牢獄の朽ちくさり、破れ傾ぶきたる中に、侍がましき者七八輩、痩せ衰へたるが、袴肩衣も破れ果てたるを引きかけ、苦しげに屈がまり居て、人かげを見ては物乞ふ風情にて、苧がらの如くなる手さし出して、震へわなゝくあり。是は百年程以前に、伊豆のさる處の役人なるよし、其邊りを見回はせば、木蔭に立ち並らびたる牢獄は古きもあり新らしきもありて、數限もなき中に、尊とく長々しき人の見なれぬ裝束し玉へるが、痩せ衰へて苦しげにに首打傾け、坐し眠り玉ふもあり。又虎ひげ生へ分れて、恐ろしき貌曲して屈がまり居たるもあり、麗はしき女中の貴とき裝束し玉へるもあり、又紫衣黃衣の貴とき出家なども多かり、又大きなる家居の立ち並らびて、賑はしき市町の如くなる處を通りたるに、人多く立ちさはぎて、家毎にそれ〳〵の稼業を勵み勤むるよと見えて、如何にも騷々しき中に、罪人と思しき者を高手小手にいましめ、引立〳〵出て入るは、家毎に引も切らず、悲々と泣き叫ぶ聲の夥しく聞えければ、さし覗き見けるに、大きなる石盤の上に罪人を打伏しに取りて推し伏せ、厚み二三尺もあるべき大石の板を其上に打ちのせ、獄卒ども多く打

寄り、くゝと推しつくれば、流るゝ血瀧の如し。又ある家には、五六尺ばかりの柱を間も無く立て列らべて、罪人を盡〳〵く縛り付けて、鐵鋏もて舌を抜出し寸分〳〵と切取るもあり。又或家には、大釜をあまた居ゑ並らべ、熱鐵の湯玉も跳び散る斗り沸きかへらせて、罪人を取りては投げ入れ、投げては取り入れ、散々に煮たゝらかすもあり。又二町も三町もあるべき大爐に、炭火を夥しく煽き立て、鐵の魚串に罪人を突き貫きて、打返し〳〵炙るもあり。或は罪人を刀俎にかけて切り刻むあり、臼にて搗くあり、天秤にかくるあり、又方百里もあるべき湖水の水の中へ、罪人を數限もなく追ひ浸して、存分にいて凍らしむれば、頭も肌も七華八裂さけ破れ、全身血に染みてさながら咲き亂れたる蓮の如し、之を紅蓮大紅蓮の地獄といふ。

罪人とは誰をかいふや、尊貴にもせよ高位にもせよ富貴自在の人にもせよ、今の世に於て、慳貪吝嗇半錢寸紙といへども人に施す事を好まず、譬へば仲冬嚴寒の氷の萬物を凍合して、萬里一條の鐵の如くし去つて、塵芥糞穢といへども漫りに放過せざるが如し、故に此苦果を感ず。問ふ一切の惡種の如き、叫喚無間焦熱阿鼻、總に是れ烈熔猛火を以て成就す、特り紅蓮大紅蓮の獄所に至つて、專ら層氷を以て責むる事は何んぞや。是を責むるに烈焔を以てせば、烈焔にして其れ足れらくのみ、是を責むるに嚴寒を以てせば、嚴寒にして其れ足れらくのみ、氷焔並らべ用ゐて、寒熱大に隔てたる者にあらずや。曰く、惡因少しく殊にして惡果大に隔たる、八寒の獄處あり八熱の獄處あり、其初め貪瞋の二泡を以て本とす。瞋は出息の象、其氣必ず暖かなり。貪は入息の象、その氣必ず冷かなり。若人瞋怒俄に起る則は、面熱し眼赤く、毛髮逆立ち上りて、さながら烈火の炎え上がるが如し八熱の報又宜べならずや。慳貪鄙吝の人の如きは、じはり〳〵と常にしめよせて、冷氣の肌骨に砭りするが如し、蚊脚虫臂といへども共に藏め、並らべ貯へて、腐鼠死蠅といへども人に施す事を好まず、彼の層氷の朽木屐破笠子、纔に少しく凍合する則んば、萬夫も奪ふ事能はず、八寒の報亦宜ならずや。高位の貴人尊貴の出家などの、やごとなき御有樣にて責め惱まされ玉ふは、一入御痛ましく見請け申侍りき、其外處々の獄所の事ども、思ひ出せば身の毛立ちて、恐ろしく覺え侍りと、絶え入り〳〵語りにたるを、見聞はべりては、夜も安く寢ねられ申さず、あはれ助かるべき道しあらば、一言なりとも教化させ玉へや、彼娘にて候ふ者も、飛び立つ計り詣て度き心には侍れど、長病の身の中〳〵一歩も叶ひ侍らず、我等ばかり右の物語を聞きもあへず、思ひ立ちて尋ねまゐりたるにて侍りとて、名號など乞ひ求めければ、書きて與へ申しき、如上の次第に侍れば、縱とひ見地透脫古人に過ぎたる作用ありとも、菩薩の威儀に依らずんば必ず魔道に落つべし。維摩經に曰く、菩薩は道場を離れずして能く威儀を現ず。二乘は道場に在りて威儀を現ずる事能はずと。道場とは空廓虛凝寂滅現前底の大事、威儀とは下化衆生の四儀、上求菩提の行持をいへり。古へ百丈、黃檗、臨濟、興化、歸宗、麻谷等の諸老、毎日作務普請の鼓を鳴らして、拽石搬土水薪菜蔬、七顚倒八狂亂、千變萬化の上に於て、正念工夫毫釐も打失せ

ず、其の綿密の行持、直に是れ諸佛の大禪定、佛祖も窺ふ事能はず、魔外も計る事得ず、是を不離道場の行持といふ。此故に、妙喜曰く、動搖の上六塵の間に於て、時々に須らく點檢すべし。那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處と。是を正念工夫不斷坐禪の法と云ふ。所謂動中の工夫は、靜中に勝る事百千萬億倍すと、此れ斯の謂なり。臨濟の喝、德山の棒、汾陽の嗔怒、金牛の舞、盤山の猪肉案頭、普化の紅塵堆裏、盡く是れ此の玄樞を撥轉す。是を金剛寶戒無相心地具足の戒躰と云ふ。慈明は是を以て此を楊岐に傳へ、楊岐は白雲に傳ふ。應庵、密庵、松源、運庵、息耕、横岳、紫野、花園、的々相承し來る底の向上の秘訣眞正の命脈なり。今時相似の禪徒、夢にも曾て知る事を得んや。二乘は道場に在りて威儀を現ずる事能はずとは、今時昏愚の流輩の如き、心源湛寂空閑無爲の處を道場なりと死執し、目を閉ぢ齒を切りて、徒らに日々淵默死坐、恰も七村裏の土地の如し。眼を開らけば道場を打失し、耳を側ばたつれば道場を打失し、喫茶喫飯、屙屎放尿、道場を打失せずといふ事なし。此故に朝より暮に至るまで、首も亦た動す事得ず。さる程に、粥飯の二時も他人の口を備ひて人に啖ませて呑ぬ計り、水も亦た手づから汲む事をせず、面でも亦た自ら洗ふに懶く、動もすれば大小の二便も人を備つて行ぜんとす。縱ひ凭靠にし去つて、歲月を重ぬといへども、道場に住し得る事を果さず。此こに於て、頻を撥めて哀吟し、眉を皺めて懊惱す。死に到るまで勞して功なき者は二乘小果の修行なり。昔し羽翼を帶びたる獺になりし修行者も、此等の部屬なり。古へ一僧あり、修行する事多年、禪味心に染み、空閑情に適ふに隨つて、日々に擇んで寂靜無人の處に入る。轉た求むれば轉た騷々しく、轉た尋ぬれば轉た喧すし。此こに於て、終に遙に深山裏に入りて、老樹の下に到る。是れ實に究竟淨極の靈地なりとして、包を下ろして默坐す。大に歡喜し大に踊躍して曰く、眞に終焉の處を得たりと。暮に及んで、鷲兒數百樹頭に來り宿して、終夜騷雜にして休まず、大に道情を妨ぐ。既にして東方將に明け、鷲兒將に去らんとする頃に至り、合掌して高聲に祝して曰く、鷲兒、汝心あらば且らく吾が片言を聞け、我は是れ寂靜の處を求めて禪定を修する者なり、汝が宿する林樹は世間に際限あるべからず、吾が求むる禪寂の地は此の樹蔭に越えたるはなし。願はくは、此の老樹をすて去つて吾に與へよ、吾をして此の樹蔭に於て法成就に至らしめよ、又再び來る事なかれと、祝し畢つて默坐す。已に日沒の比に到りて、衆鷲又來り集る事、依然として每夜止まず。此こに於て、憤然として彼の樹蔭を捨て去り、終に他方に行かんとす。乃ち彼の樹頭を睨んで惡願を發して曰く、儞等鷲兒、大に吾が道業を妨ぐ、我れ儞等と何んの寃かある、我れ今正に此樹蔭を捨去りて他方に行く、儞等鷲兒能く記取せよ、我れ如し果して道業を成ずる事を得ずんば、死して必ず鐵爪金牙の鷲となり、逐一儞等を捉らへて、裂いて食らひ盡くすべきぞ、其時我を以て寃とする事勿れと、祝し了りて泣々起ちて他方に行く。行いて一の岩窟に到る、前面は萬丈の碧潭藍の如し、窟中正に一榻を入るべし。彼僧大に喜躍して曰く、天我に究竟

寂默の處を賜ふと、定坐する者累日、鯉魚あり數十口、晝夜に潭面に醼跳して甚だ道念を驚かす事、彼の樹頭の群鷺に異なる事なし。即ち潭中を望んで合掌して祝して曰く、鯉魚よ、〳〵爾は是れ鱗中の長にして果して池中の物にあらず。他日雲雨も亦た領すべきの德あり、彼の樹頭の愚鷺が類にはあらず。嗟々鯉魚爾如し心あらば且らく我が片言を聽け、吾は寂寞の處を求めて禪定を修する者なり。今此の岩窟大に吾心に適へり、然るを爾が盤水面に躍跳して大に吾が道業を妨ぐ、吾が心甚だ之を思ふ、爾も亦た罪なきにあらず、願くは今日より妄りに躍出する事を止めよ、我をして速に法成就に到らしめよ、然らば則ち爾が出離の正因ともなるべきぞ、愼しめや鯉魚、再び躍る事勿れと、祝し了りて湛然とし默て坐す。鯉魚依然として躍りて止まず、此こに於て憤然として又捨てゝ他方に行かんとす。即ち潭中を睨らみ合掌して惡願を發して曰く、爾等鯉魚、吾が道業を妨ぐ、此故に此岩窟を捨て既に今他方に行く、我が爾に於ける何の怨みか在る、我れ如し道業を成就する事能はずんば、必らず死して鐵爪金牙の獵となりて、逐一爾が部屬を捉らへて裂いて食すべし、爾鯉魚其れ之れを記取せよと、泣々亦た岩窟を出てゝ行く、行く事僅に數十歩にして悄々としてそぼろだち、

世を捨てゝ山に入る人、山にてもなほ憂き時は、
いづち行くらんと。

といへる古歌を打ち吟してわゝと泣き叫びけるが、憤然として歸り來り、遂に彼の潭中に投じて死す。乍ち一箇の大白獵となりて、潭中を驅り廻

ぐる事七縱八横、盡く鯉族を捉らへて、頭を咬んですつ、萬頃の碧潭俄に變じて血となりぬ。時に群鷺見あり、空中を列り過ぐ、獵一見して大に嗔り、乍ち奮願を覺得して空中を睨らんで大吼一聲、兩翼直下に張り、長空を翔ける事縱横無碍、閃電を鈍しとし、石火をおそしとす、逐一彼の群鷺を蹂んで、頭を咬み捨つ、鮮血雨の如くに長空に洒ぎ、鷺羽雪の如くに廣野に飛ぶと。恨むべし、無上菩提を求めんが爲に、許多の苦行を行じて、永劫惡趣に墮す。是他なし、最初惡知識の教化を信じて、心源湛寂の處を自己本有の佛性なりと相心得、寂靜無事の處に竄くれて、想念を空じ盡くし、灰心泯智木人石女の如くし去りて、以て菩提を成ぜんとす、大に錯り了れり。老僧初め此の流類に墮し、懊惱する者三年、身を置く處なきが如し。一日諸經要集を一見し、此の一件に撞着して大に前非を悔ゆ、故に繁文を省みず、併せ書して以て進覽す。悲い哉、今時天下の禪徒此等の流類少しとせず、老僧四十年前業風に吹倒せられて、此の暗窟に陷墜して、進む事得ず、退く事得ず、右に突き左に當ると雖も、全く透脫の力を得ず、常に好んで暗室に默坐す、兩脚氷雪の底に浸たすが如く、雙耳溪聲の間を行くに似たり、起居恐怖多く、兩眼常に淚を帶ぶ、塊痛あり毬子の如く常に胸膈の間に在りて上下す、點檢し看來れば、總に是れ有氣の死人、心火燦々として二稅を欠ける百性の如し、晝夜に嗟悼し懊惱すといへども、救ふべきの心術なし、生きて世間に在る事を好まず、常に心に竊に謂へらく、願はくは、早く丘壑に餓死して、此の憂惱を遁れんと、來生の不如意は總

於仁安佐美

に顧みざりき。此こに於て、密かに行纏を着け、後生晩進の輩此病因の芽ざすを見る則んば、赤子の井に赴くを見るが如し。精神を奮つて以て之を告げずして出づ、西の方尾濃泉河の間を往來して、救はんと、危亡を顧みず軀命を惜まず、天下の人數員の知識に見ゆと雖も、只だ各々同病相憐れむのみ、如何んともする事能はず。一老宿あり告げの貶剝するに一任す、邪坑とは何んぞや、紫野國て曰く、唯此の一生を抛擲下して、深山岩崖人迹師の

三十あまり、吾も狐の穴にすむ、今ばかさるゝ人もことはり

不到の處に入りて、其の山の草木と共に朽ち果てんとするより、外一法の施すべきなしと、予深く此語を信じて、禮拜して泣々出づ、予即ち香を燒き大誓を發して曰く、我れ若し此の邪坑を透脫する事を得、眞正の所證を得ば、誓つて此の邪黨を破せん。我れ如し此の邪坑を透脫する事を得ば、誓つて此の禪病の人を守護せん。我れ若し此の邪坑を透脫して、眞正の所證を得ば誓つて禪病予が如き人を救はんと。後來明師に投じて漸く病根を拔く事を覺得す、所證未だ十分ならずと云へども、

と詠じ玉ふ黑暗の塵坑是れなり。

つら〳〵考ふるに、籠下の御不例も亦た少しく是の禪病をかねさせ玉ふと、見うけ奉りたれば、薄き氷を蹈み蜘蛛の絲もて萬斛の船を繫ぎ留めたる心地し侍りき。大に驚き大に恐る、此故に、罷り上り侍りて、其度毎とに、專ら此禪病の事を持論し侍りき。然るに、間もなく全快に赴かせ玉ふ御事、愚老に限らず、近習外樣の人々までの歡踊、

筆も及ぶべき事かは。此上猶々御養生肝心の御事に侍り。籠下御一人の御惱は、五人や十人の心痛に罷り成るべき事かは。此故に、此度の書通も何卒御再發ましまさぬ樣にと、祈る計りの方寸にて侍り。去り乍ら、只今迄御心を盡くされし御修行を、透きと休めさせ玉へ、只今迄の御工夫を捨てさせ玉へ、と申には侍らず。三乘の賢聖、古今の智者、正念工夫の大事を離れて、法成就に到りたるは半箇も亦た侍らず、是を不忘念智と名付けて、果滿の曉に到るまでに、片時もすて離るべからざるの大事にて侍り。然れども、其の進趣の間に於て、少しき賢愚利鈍なきに侍らず、其等差を分け、利害を辨へしめんが爲に、調御且らく聲緣菩三乘の階位を設け其優劣を立つ、惜しむべし、二三百年來此の否泰を論ずる底少れなる事を。夫れ三乘の階漸は、佛道の大綱にして行者最初に辨別すべきの至要なり。此大事を顯さんが爲に、久遠の古佛、及び大權の諸大士、假りに且らく身子、滿慈、善吉、慶喜等の鄙賤小果の身を現じて、如來の呵責を受け、或時は尊重讃嘆し、或時は涕淚悲泣す、是を內秘菩薩行、外現是聲聞と云ふ、豈夫れ輕々の事ならんや。然るを、近代天下の宗師、叢林の善知識なりと歸仰せられ、江湖の舊參頭角の衲子なりと稱せらるゝ底の族も、奴郎辨ぜず、玉石分たず、往々に背地裏に在りて、心に竊に謂へらく、所謂聲聞二乘とは、古への頑賤無知昏愚の輩ならくのみ。覺得下して總に胡爲の者といふ事を知らず、恰も盲驢の足に任せて行くに似たり。誰か計らん、最初より身の其山中に在る事を。昔は知つて、此の山中に入り、今は迷ひて、此の山中に

在り。夫れ六塵を避け嫌ひ、寂靜の處を好んで、死坐して深く禪味に耽着する、是を二乘小果の人とす。是は佛祖も忌み嫌はせ玉ふ禪病に侍り、圓頓の菩薩の如きは即ち然らず、五塵六欲の上、七顚八倒の間に於て、逆順の境界を擇ばず、淨穢の二法を見ず、畜生修羅の惡趣に入りて、一切を利益せんが爲に、千萬種の善巧を現ずれども、常に道場を離れず、正念工夫も間斷なき、是を菩薩の威儀といふ。動中の工夫は、靜中の工夫よりは、一と際抄行かぬ樣に覺えらるゝ者に侍れど、動中の工夫は、一寸修し得れば一寸の得力にして、一生の受用を助く。靜中の工夫は縱とひ一丈を修し得たりとも、僅の塵事に觸るゝ則んば、忽ち總に打失して半寸の功をもなさず。此等の族を二十年糞穢を除く底の修行者とす。三祖の「欲に在りて禪を行ず火裏の蓮」と言ひ置かれしも、動中の工夫を讃嘆し玉ひたる言葉にて侍り。彼の水より生じたる蓮は、火氣に逢うては乍ち枯れ凋む習なるに、火裏より生じたる蓮は、火氣に逢うては轉た色香を增すが如し。風に破られ、潮に痛めらるゝは世間の草木の習なるに、伊豆田子あられ、又は松島や御島の濱の磯邊なる、岩の岩根に生ひそだちたる磯馴松は、二葉より風に煽られ、潮に揉まれ習ひたるが故に、如何なる荒き風波に逢うても、少しも痛める氣色なきが如し。此故に、宗峯妙超大師動中の工夫を詠じ玉ひて、

見るや如何に、加茂の競ひの駒ぐらべ、驅けつ返へすも坐禪なりけり

と、又彼の默照枯坐を呵し玉ひては、

佛にもなり固まればいらぬ者、石佛等を見るに付けても

と、詠じ玉ふなり。固まればとは、念を生ぜじ心を動さじと思ひ籠めて、切毘羅が石になりたる如きをいふ、さる山寺には、默照僧の石になりて、其石を見たる人々の物語を、目のあたり聞侍りき。此等の病を救はん爲に、眞珠庵主の法語に、

煎茶摘むべからず、坐禪すべし。看經すべからず、坐禪すべし。掃除すべからず、坐禪すべし。馬に乘るべからず、坐禪すべし。納豆作るべからず、坐禪すべし。茶の實種うべからず、坐禪すべし。

と、是は一向に萬緣を拋擲却して、坐禪せよとの心には侍らず。談笑戲論、動足擧手、一束に束ねて換轉却し將ち來りて、一枚の禪定三昧とす。岩頭の所謂物を轉ずるを上とす、物に轉ぜらるゝを下とすと、斯れ此の謂なり。譬へば、彼の神龍の苦鹹の海水を捲き上げ、甘露の膏雨となして、洒ぎ將ち來りて、荒旱の稼苗を蘇するが如し。此等の趣を、能〳〵勘辨せさせ玉ひ、動靜二境の利害を思し召し分けられ、北野又は祇園清水など、人立ち多かる所へも、時々詣でさせ玉ひ、法成就をも祈らせ玉ひ、又物の騷々しき處には、正念工夫相續間斷ありや否やをも辨へさせ玉ひ、今時澆末の衰風に倣つて、片時も死水裏に浸殺せられ玉ふべからず。老僧若年の時、眞言宗の寺に入りて、初て東方降三世等の五大尊の像を見けるに、心に大に怪しみ謂へらく、猥藉なる風情の佛やはある、獨相撲の守神か、當て身やはらの本尊か、何にもせよ無公義なる佛なるぞと、笑ひたりしが、近頃思へば、行者勇猛精進の一機を標して貴とぶべき

於仁安佐美

の靈像なり。四尊勇猛の精進力に守護せられて、侍らず。大乘圓頓の參學は千差萬別の塵務、取りも直さず直に是れ潛行密用の大事、七縱八横の世中尊大聖不動明王は嚴然として立たせ玉ふなるめり。つら〳〵顧ふに、四尊惡毒瞋怒の風標は、誰波の儘にして、總に是れ正念工夫の全體なるぞと、か計らん、諸佛無上の大禪定、金剛無作の戒體に行住坐臥の上に於て、親切に參窮する是れ肝心の秘訣に侍り。時に一僧あり問うて曰く、師從頭禪病數段の本根、利害の淺深を敎示せらる、中に就いて、心源浩寂默照枯坐、灰心泯智寂滅空洟、此等の痼疾の如き、膏肓に入り肺腑に透りて、佛手も亦た醫し難き者に似たり、此を爲ん事如何、既に是れ病因を見る、豈夫れ此を救ふの靈劑なからんや。予が曰く、茲に換骨の靈方あり、此等の重痾を救はんが爲に、古德且らく、此の善巧を設く、一切の行人佛祖所證の田地に到らんと欲せば、諸方婆禪の涎唾を舐らず、相似禪徒の敎化を執らず、白盲に自己に就いて參究し、或は隻手の音を聞得して、眞正一回見性の眼を開くべし。而して後、此の難透の話頭に參ぜよ、宗峰妙超大師曰く、終日肩を交ふ我何似生。本有圓成國師曰く、栢樹子の話に賊の機ありと。二大士の語話、分明に徹見する事を得ば、乾峰三種の病、五祖牛窓橋の話、鹽官犀牛の扇子、翠岩夏末の話、必ず掌上を見るが如けん。而して後、自ら點檢して看よ、何んの重痾の除くべく、藥餌の求むべきかあらん。此こに於て、無緣の大慈を起して、菩薩の威儀を學び、大法施を行じ大に人を利して、以て佛祖の深恩に報答す。是を眞正の佛子常家の種草と云ふ。

右管々しき繰言、御披見も六ヶ敷思さんも憚り入り侍れど、是を次てに、近習常隨の尼僧上蔦達、及び世間初心の修行者達の工夫の一助にもなれかし、且又此文を一見したらん人は、直下に勇猛不退の信心を煥發して、同じく共に種智を圓にせん事をと、彼の誓願度の方寸にて侍り。老僧親切の微志をも思召されなば、何返も御熟覽遊ばされ、御机の上に線香一炷を添へさせ玉ひ、法喜禪悅の御營みと思召され、說法敎化の代りに、近習の尼僧上蔦達にも、高々と御讀み聞かせ、法施の一助になされなば、經にも一切功德の中には法施の功德を第一とすと、說き置かせ玉ふからに、之に過ぎたる菩薩の威儀は侍るべからず。然らば則ち、自然に佛國土の因緣に御契ひ成され、速に法成就に到らせ玉へかしの寸志にて侍り。且又如上の頓言倒語、如し讃佛乘の因緣にも相契ひ侍るべくば、願はくは此の功德力に依りて、

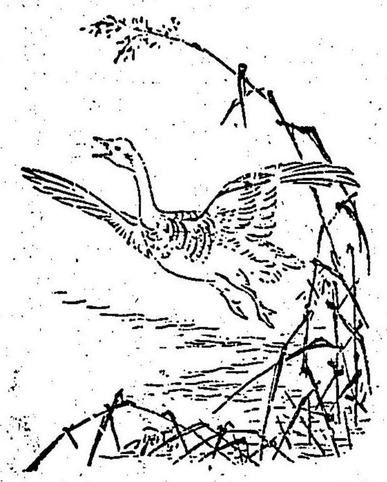
皇國鞏固、佛日光輝ならん事を。特に祈る

今上皇帝聖躬萬歲ならん事を。次に冀くは

於仁安佐美

兩宮簾下、心身勇猛衆病悉除、壽算は彼の若州八百歳の尼公にあやからせ玉はん事を。穴　賢

維時寛延第四辛未之暦仲秋三五之佳辰



紙鳶

をのかまゝやらぬが爪の命哉

惠美壽醉像畫賛

蚩來(ひるこ)とや見て何がさてよひ惠美壽

蟻臼をめくる圖

磨をめくる蟻や世上の耳こすり

藥病相治の說（病者某居士に示す）

夜前より天氣も惡敷、寒温時分ならず被存候。如何御氣分に障り不申候哉、貴所此度絶前絶後の病難、今以て十分の物、二三分の利運被得候とは不被存、乍蔭如何計り、苦勞に存ずる御事に候。此節大切の折柄に候。隨分食物等御慎可被成候。今少しの中の事に候。此上は、人々何程藥と成る物に候とて、懇々勸め申候とも、湯藥の外一切食養生の心持有之間敷候。食事等にて利運を得候事は、尋常達者なる者の事に御座候。當分中、食事抔にて補ひたて可申氣分とは、更に不被存候。何卒何卒、此儘にて次第に全快被成候樣に仕度候。朝暮無間斷、祈願も出精中事に候。皆々も殊の外被出精候樣に相見え申候。餘りの事に、昨今は我等か壽命相應に御省き被成候共、此度の病難御救被下度と、佛神へも御願申との事に候。我等に不限、近隣の寺院、僧尼小法師の類まで、貴所の快氣を願ふ者多く御坐候由。寔に以て貴所の身に取りては、冥加至極の至、乍蔭嬉敷事に候。此上貴所の御慎には、第一食事、扨又時々に氣を使ひ世話燒かれ候事、以ての外なる毒にて御座候。此程は別して世話燒かれ候樣に見受申候。是は近頃以て貴所日頃の心がけには似合不申候樣に被存候。此程の樣に世話燒かれ候ては、心火增し上り、肺金は吉野紙のうすさの樣に被成可申候。其薄き肺金より、中の本元の水分を可養樣は無之候。水盡き枯れ果て申候ひては、命根を可保樣は及びもなき事に御座候。其の子細は水分枯れ力弱り候へば、火氣を製する事能はず、次第に氣燥り、世話燒かれ候事も增長いたし、果ては白盜の二汗にも及び、

骨焦勞熱の症にも被成可申候。腎虚と申は、男女の交合計りにて起る事にても無之、獨身にて蒲團上に坐し候ても、心を使ひ世話燒申候へば、肺金痛み痒けて、水分枯竭仕者の由承及候。此間見舞申候に、時々少し宛さむけも御座候由、是は畢竟水分不足にて、火氣增長の催にても可有之乎と存候事に候。醫家にも、北方の水を養ひ保ちて、南方の火を防ぐと申論有之由承及候。總じて火氣は假初にも枯竭致し易き者の由、譬へば一點星ばかりの火を得て薪をかけ、風に乘じ候へば、原野を燎き拂ひ、石壁を劈き崩す程の力も、城邑を灰燼にし、聚落を焦し空しうする程の勢も、乍ち見る事に候。是は打集ひたる、只七歳の童兒の手際にも可被成事に侍る。又一椀の水を得て、是を斗升の水に增長せんとて、如何なる哲人智者打集りて、孫吳が術を盡し、良平が籌を運らして、禱りても祭りても、中〳〵一滴も增長すべき樣は無之候。本より天地同根にて侍れば、世間の水火と身中の水火と、二品可有樣は無之候。さるに因りて、假初の瞑りにも、面赤く體熱く成り候事、是れ動もすれば、火氣の逆らひ上り易き驗に候。只今の內、隨分恐れ慎みて、大君の傍に侍するが如く、神仙の室に入るか如く、心を靜め性を治めて、養生一片に被成、世間の事は努々御心にかけらるまじく候。身ありてこそ、世間も候へ、身だに達者に成り候はゞ、見事兎も角も可參事に候。吉凶は糾へる繩の如しと侍れば、人の身の上も惡敗事ばかりも無之ものに候。快氣の後、存じの外目出度事も出來可申候。兵法にも、身を死地に置きて、全活を得ると申事の御座候。是は身をば死切りたる物、冷え堅まりたる物と、思切り捨果て申候へば、存心の外、十死を遁れて一生を得ると申事に候。打捨つると申せばとて、身持を粗末に致し、食事又は養生を等閑にせよと、申事にては無之候。只今打捨つると申は、死に切りたる者の、如何に世話やき申事の侍るべき、冷え堅まりたる者の、如何に食好み致す事の侍るべき、是死にあらず是生にあらず、是有にあらず、是無にあらず、是聖にあらず是凡にあらず、神にもあらず佛にもあらず、混々沌々として、何んの合點もなく何の分別もなく、只々初生の孩兒の如く、何事も天運に任せ、手を放ちて、蒲團上に物外の一閑人になり濟まして、御養生被成候はゞ、自然と本元の一氣靜まり定り、兩義分明に分れて、五臟百骸盡く力を得て、次第に快氣可有之候。昔呂洞賓と申者、貴とき仙翁に見え、神丹を練る法を敎へ給へと願ひければ、仙翁曰く、一七日齊戒沐浴して來るべしとなり。如敎一七日相勤めて參りけるに、心機未だ定まらざる故、今一七日齊戒せよと云はれける。又々一七日相勤めて行きぬ、仙翁曰く、丹といつば世間に申傳へたる、黃金のすりくづを以て、朱に和して煉る事三年、又は七年する樣云へるは、根も無き妄談なり。夫れ眞實長生不死の神丹は、外より得るものにはあらず、汝が本然の性德を治め、汝が本元の一氣を守りて、眼亂りに見ず、耳亂りに聞かず、口亂りに言はず、身亂りに動かさず、心妄りに馳せず、眞氣を臍輪氣海の間に養ふ時は、渾然として一片の元氣のみなり、是を丹を練るといふなりと。さる程に、呂洞賓は、臍輪の下に丹田ありと此敎を慎しみ守り、久しからずして仙術

を成就したる由、所々申傳へ侍り。寔に以て上の教の如く、慎しみて相守らば、生身の長生不死の一眞人、何つれの病か治せざる事の侍るべき。何つれの壽命か保たざる事の候ふべき。此心をよくよく御料簡あらば、押付け目出度快氣被成事、掌を指すより慥なる事に可有之候。又只今の通、氣を使ひ世話燒かれ候はゞ、肺金は羅穀の如く薄く成り可申、母痩せ疲れて、孩兒の肥え膨るゝ事は無之習ひに候へば、彼の薄き肺金の母より、水分の子、一滴も生ずる事は成りがたく候。貴所には、之より此肺金の母にて候。況んや脾土の前々より弱り痛み侍る者をや。水分は元と一切の人の根元にて侍れば、其水無之ては百人が百人、千人が千人ながら、壽命を保つことは叶はざる事に候。彼樣の大切の時分は、恐れ慎しむより外の事は無之候。孔子も、雷迅く鳴り風烈けしき時は、束帶して慎しみ坐し給ふと承及候。只今貴所の內證には、迅雷轟き烈風荒さむとや申べき、一髮千鈞恐れても懼るべきは此時節と存候。然る處に、益もなき外事に目を配り、性命もなき世緣に心を役して、世話燒かれ候事、寔に以て千金の玉を以て、雀の礫に拋つ心地して、傍にてはハア〳〵と心痛み申事に候。古語にも、貧賤に素しては貧賤を行ひ、患難に素しては患難を行ふと侍れば、只今、病累に素しては病累を行ひ、心を靜め欲少くして、肺の母を凉しく養ひたて候樣に可被成候。左も無くては、少計りの肺金を、世事の鑪にかけて、晝夜に殺ぎおろすよう痛間敷被存候。此節隨分忍びて、御慎しみ可被成候。昔或山中に金色の毒蛇年久しく住み侍りき、此蛇常は八旬に餘れる老翁と化して、結跏趺坐して石上に端坐す。纔に少しく睡るときは、不覺本形を顯露し、通身の金紋五色を交へて、光彩目を奪ひ金氣膽を照して、目出度も美くしかりければ、一人の獵師如何にもして、此皮を剝ぎ奪ひ、千金に代へんと、日頃附け睨らひけれども、此蛇一度瞋るときは、毒氣天を焦して怒號山を拔き、迅き事風の如く烈げしき事火の如くなりければ、たやすく近付くべき樣もなくて過ぎけるに、此蛇近頃沙門に逢ひて、五戒を授かりたる事を探り知りしかば、彼の獵師案ずる處ありて、身に佛袈裟を纏ひ、竊に毒箭をわきばさみ、彼の山中に分け入りて、毒蛇の潛み住みける所へ狙らひよりぬ。毒蛇は沙門なりけりと心得、悅びて相待ちける所を、箭ごろ近くなりければ、引絞りて兵と放てばあやまたず、毒蛇の胸板に、のしかに射通しぬ。毒蛇大に怒き、鎌首をふり車輪の如き眼を見張り、獵師目蒐けて飛びかゝるべきけしきなりける。獵師之を見て、袈裟かきつくろひ掌を合せて、南無三寶我昔所造と唱へければ、此蛇乍ち思ひ直したる躰にて、獵師に向ひて云く、早く立寄り我通身の皮を剝ぎ取るべし。我常に大海を傾け巨嶽を飛ばすべき力ありて、かばかりのをれ矢は裝毛の如くたちたりとも、汝等五十人や百人は、微塵の如く粉碎する事いとやすし。されど、我は近頃佛の戒行を受けたる身なれば、汝を許し更に害する心はなきぞ。一度は一切衆生をも利益すべき志願ある身の、何しに暫時の瞋りによりて、逢ひがたき佛の御法に背き奉る事のあるべきや。疾くさしよりて、憚る心なく思儘に行ひてよとて、目をひしぎ齒をくひしばりて、相待ちけ

れば、獵師は嬉しげに仕たり顔して、氷の如き刄を突き立てながら、けなげに殊勝に渡らせ給ふ者かな、寔に感涙肝に銘じて、貴とく覺え侍るぞ。げにな、左おはさでは、佛の御法を得給ふ事は叶ひがたからめ、我等此山中を出てざらん限りは、忘れ果ても瞋り玉ひそ、腹たち給ひそとて、全身の皮を殘らず剝ぎ取りたるも、毒蛇は露瞋り恨むる心もなくて、忍び堪らへて少しも動き働かずして、佛の敎を愼み守りける由。所々に說き置かれ給ひたるにても、つら〳〵思ひ侍るに、左なきだに、日頃瞋恚の强き蛇身の誑かれて、斯かる憂き目を見る事、さぞな如何ばかりか苦しく、如何ばかりか無念に侍るべきに、貴とき御法にそむき奉らん事の悲しく、末には一切衆生をも利益すべき願心の、是れあるにこそと思ひやり侍れば、悲嘆の心やる方なく、歡喜の涙止めあへず覺え候。此等の古實を見候に付け、世間に堪へ難く忍び難き事の、無かるべくも思はれず候。況して假初の世話や、食事抔愼しみ守り申事は、當底の人さへ侍るに、殊に貴所は道情もおはする人の、隨分〳〵御守り可被成候。貴所一人愼み守り被成候て、早速快氣被成候は、大勢の人々の悅び勇み申事、如何なる善業作福にも勝ぐれ可申候。又さもなくて、醫者にも見限られ、祈念者にも思ひ切られて、藥も灸も云ひ甲斐なく、手も切れ果て望みも盡きたらん時の、皆々の心の內、如何取り捌き可申哉、起ちても居てもあるべき事かは、叫喚衆合の苦にも中〳〵まくべき事とも思はれず候。然れば則ち、大勢の人々を悅ばせ勇ましむるも大勢の人々を悲しませ、苦るしましむるも、貴所一念の上にしある事と被存候。昔の毒蛇は、見もせぬ聞もせぬ後の衆生の爲にさへ、斯かる憂目を忍び堪らへ侍りき。貴所には、目のあたり名殘惜しく、捨て難き人々の爲に侍れば、是非〳〵如何なる事をも忍び堪らへて、快氣すべきぞと可被思召候。人の父としては、慈に止ると申事の侍り、只今貴所の身にとりては、快氣被成より、外の慈に止り樣は無之候。古人も仁者の心の動きなき事大山の如し、無欲なるが故に能く靜なりと、申置かれ候。貴所は常々事多く苦勞被致候身にて侍れば、せめては病中に成共、湛然として心を靜め、養生可被成候。昔さる僧あり、緣の欄干に凭り、湛然として坐し候へば諸天渴仰し、又少しの間世念起り候へば、惡鬼來りて唾を吐きかけ申候由。此程在家も出家も、貴所の快氣を祈り、三千卷の誦經一千卷の書寫など、思ひ〳〵の祈念有之、香燈の絕ゆる間もなく、昼夜丹誠を抽んて、禮拜恭敬處々に相勤められ候へば、諸天善神も擁護の眸を垂れ可給候。然る處に、貴所も心を靜めて、日頃御心がけ被成候、中道本有の心性を供養被成候はゝ、能感と所感と互に冥合して、水と氷と合へる如く、平等一味の法藥と相成り、如何なる百座の護摩にも勝り、千部の陀羅尼にも超えて、目出度祈禱と相成、押付快氣可被成候。經にも一念の瞋の火は、無量劫の功德の林を燒くと、說き置かれ侍り。此程東西の老少男女は、貴所が不慮の病難を悲しみ、平生の仁心を慕ひて、鰥寡孤獨の類の中には、二日三日湯水を絕ちて、歎き沈みたる者も有之由、定めて聞も可被及候。熟〳〵考へ見申候に、經にも、惡まれもの神かたきと申、貴とき本文も侍るから

には、快氣の後は、此に常々了簡も可有之事に候。さるに依りて、所々に於て全快を禱り、誦經禮拜諸々の功德を種る申候ても、當人の貴所が、一念世話燒かれ、瞋火を炎やす時は、上の人々の功德、皆々燒き拂ひ徒事に可被成候。譬へば能く根づかぬ樹を擇び求めて、百人にて汗水に成り、植る立て申とも、中々林を成就する事は叶ひ申間敷候。我等如斯拙き繰言を、心の及ぶ丈言ひ送り候も、雖々も住み果つべき世の中ならねど、竹馬より睦じく語らひ侍るものを、せめては今七八十年も、諸共に生きのび、互に心の伽にもせまほしくての事に候。願くは、何方も互に年寄り朽ちて、別離も無常も絲爪の皮とも、不存迄に成りての事に可仕候。人生れて靜かなるは、天の性なりと申事の侍れば、心靜かに安らかなれば、必定天年を保ち可申候。必〳〵病中は坐禪の心になり濟して、何事も打ちすて、氣永に養生肝心に候。目出度かしこ。

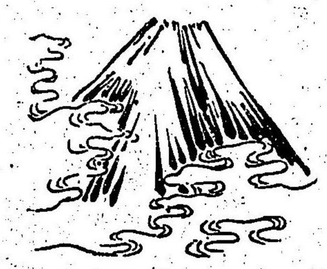
藥病相治の說　終

三敎一致の辯

昨日三敎聖人の贊辭に。三敎一致。一致三敎。畢竟如何。在レ止二至善一と書き送りけるに。至善の兩字得て聞きつべしやとの書面。近頃奇特千萬の好一拶。隨喜の餘り取りあへず。大略書付け進覽致し侍り。大凡三世を貫通し古今を銷融するものは至善なり。大凡聖經賢傳諸子百家數萬卷の書籍を超越して。最尊最上最第一なるものは。至善なり。昔黃帝遙に廣成子が巖窟を尋ねて。大道の至要を求め給ふ。廣成子が曰く。陛下若し大道を求め給はゞ。齋戒沐浴七日を歷て來り給ふべしと。帝敎へに任せて三七齋戒して行きて道を求め給ふ。廣成子が曰く。至道の極昏々默々たり。至道の精杳々冥々たりと云ひ畢りて。眼を收めて總にものいはず。大凡十方の聖賢古今の智者。至善に止まることを勸めて。而して後に明德を明らかにし。大道を成就す。禪門には是を自性本有の至要とし。律家には是を無相心地の戒體とし。密乘には是を阿字不生の日輪とし。台敎には是を法性寂然圓頓止觀の大事とし。淨家には是を唯心淨土六十恒河俱底那由多旬の如來とし。老莊は是を虛無の大道とし。神家者は高天原と相傳す。三世古今の間に至善を精修せずして法成就に至るものは半箇もまた無し。老僧幼年の時。至善に止まる事を求めて精錬刻苦するもの三年。一人と萬人と戰ふが如し。果して二十四歲にして工夫乍ち打成一片の一無雜。食息ともに忘れて。萬里の層氷裏にあるが如く。身心ともに打失して大虛空の如くなるもの。動もすれば或は三日或は五日。一夜遙に鐘聲を聞

きて。忽ち大死一番氷盤を擲碎するが如く。玉樓ず。青黄赤白にあらず。言詞の及ぶべきにあらず。を推倒するに齊うして忽然として打發して。大歡寂に昏々默々。杳々冥々たる事を閲得せむ。此處喜を得。涙痕連り飛ぶ。後來四十年間孜々屹々。に向つて。屹と牙關を咬定し。脚跟をふみ定めて。終にむなしく過すの光陰なし。今歳古稀の馬年を動中を嫌はず。靜處を取らず。縱ひ七佛出頭し來歴れども。身材健康。心神勇猛。氣力は次第に二るも。總に顧みず。叫喚大叫喚の惡境前後に化現三十歳の時にまさりて。平生を輕快にすといへどすれども。少しも恐怖の心を生ぜず。一百二十斤も。少しも以て足れりとせず常に四弘の誓願輪に の重擔を擔ひて。羊腸嶺頭に登るが如く勵み進みて。鞭ちつて飽くことなし。居士もまた是より至善に て退かずむば。一朝忽然として雲霧を開いて。昊日止まる底の至要を求めむとならば。喜怒哀樂のいを見るが如く、心上分外に平坦に。分外に清涼にまだおこらざるはじめ。得失是非のいまだ兆さゝして。譬へば萬里の異鄉に在りて。嶮山を涉り。る以前に向つて。屹と心をゆり定めて。一身の元江海を歴て。許多の艱辛を喫せし人の。覺えず鄉氣をして。臍輪氣海丹田の間に充塞せしめ。自己里にたち歸りて。妻子と共に在るが如く。寥々然に就いて點檢せよ。是れ老なりや。是れ幼なりや。たり悠々然たり。吉凶榮辱にも障へられず。是非是れ男なりや。是れ女なりや。子細に點檢し來ら得失にも奪はれず。動處靜處是處非處。總に一般ば。いつしか自己本有の心性智にあらず愚にあら なることを覺得せむ。是れ即ち彼の止まることを知つて。而して後に定まることある底の時節といつら〳〵おもふに居士の如きは宿福優かにして。ふ。此に至りて足れりとせずして。綿々密々單々一鄉の長家に主として人望も厚く聲價また高く。に相續しもて行くときは。一朝乍ち彼の晦庵が謂耳順從心の齡を經れども。身躰健康に。壽山繁茂はゆる。力を用うること久うして一旦豁然として。萬事心にまかせ。一鄉の善士と稱せられて。貫通するに至つては。衆物の表裏精粗到らずといして。吉凶榮辱。飽まで經つくし給ふ事は。前生多生宿ふことなしといへる底の大歡喜は掌を見るが如けの善の致す所ならずや。誰かはからむ。今生の尊貴む。是れ彼の定まつて而して後に靜かなる底の寶高位。大名高家等の富貴自在の人々は。盡く是れ處なり。此に至つて初めて人々具足の明德。本來前生多少の後世者達の。佛にならむ。菩提を成就圓明に。本來清淨なることを徹證す。貴ぶべし靜せむとて。持齋し持戒し讀誦し書寫し。身命をの一字。動靜の靜にあらず。深山古廟裏寥々寂々しまず財産を顧ずして。萬善を行ひ盡し給へる人底の靜にあらず。文字を以て寫すべからず。言語人の再來し給へるならむとは。縱ひ三界の秘密を を以て演ぶべからず。至善に止まることを勤めて。行じ盡くし。八宗の奥義を學び究めたりとも。至清苦歳月を重ぬる人にあらざるよりは夢にも曾て善の大定を修せず。見性の正眼をひらかず。菩薩見ることあたはじ。然らば即ち敬しても敬しつべの大行を行ぜざらむ限りは成佛は叶ひ難きことなきは至善なり。勤めてもつとむべきは明德なり。り。然れども前生の勳果空しからずして。富貴自

在の身に生れて。過去の善業は。ふつと忘れ果て。富貴を頼み。威權にほこりて來世あることは夢にも知らず。多くの婦女を集め貯へ。筋なき奢に金銀を費し。領内の生民を貪りかすめ。宿昔萬善の功德を遺ひ盡くし。或は河狩り野牧と名つけ。鹿狩鷹狩と稱して。多くの物命を苦しめ害し。近從の人々にはいふに及ばず。何心なき奴僕の類まで。限りもなき惡業を勸め作らせ。果ては三途の惡處に墮ちて。叫喚無間の底に沈みて。俱底恒沙の苦患を受け。出離の時節を得ることなけむ。われも人も眼を合はすれば。盡く是れ冥土黄泉の人ならずや。老來なりとも怠り荒み給ふべからず。たとひ彭祖が八百の歳時を經盡くし。浦島が長壽を保つも。誰か死せざる人のあるべき。惜みても惜むべきは今生片時の光陰なり。是故に永平の開祖の云はく。行持あらむ一日は。貴ぶべきの一日なり。行持なからむ百年は恨むべき百年なりと。去る程にいにしへ宣士といへる人は。七十にして初めて學を好みて。博士の位にのぼり。脇尊者は。八十にして初めて道を求めて脇席に着けず。果して道果を成じ給ふ。是のゆゑに文殊大士の曰く。若し人靜坐すること一須臾すれば。百千無量の寶塔をつくるにまされり。寶塔は時あつて壞滅す。靜坐の功德は盡くる事なしと。靜坐とは何ぞや至善に止まらざれば靜坐にあらず。經に曰く。此經は持ち難し。若し暫くも持つものは。我れ即ち歡喜し。諸佛もまたしかりと此の經とは何ぞや。黄卷赤軸の謂にはあらず。諸佛無上の妙道なり。妙道とは。即ち人々具足の心性なり彼具足の心性をさして。かりに暫く至善と名づく。持つとは何ぞや。至善に止まるを云ふ。至善に止まらざれば。法華經の行者にあらず。誰かはからむ至善は即ち諸佛無上の大禪定なることを。この旨を信受せむ人は。縱ひ今世に打發せずとも。自己の八識田中に薫受し持ち去りて。金剛を呑むが如く。此の緣因にひかれて。生々世々。三塗の惡處に墮せず。機に出頭し來らば。一聞千悟の人とならむと。是れ先德の遺言にして。貴ぶべきの寶訓なり。相構へて老來なりとて打捨て給ふべからず。老いまさるほど勵み勤むべきは至善なり。不思議の勝緣にや。去回桃源の松源會中。老贏を顧みず。疲倦を忘れて。毎日老歩を運び剩へ予を私第に請して。饗應一晝夜。珍膳を設け。佳菓を進めて。親しく法語を求め給ふこと再三。其の親切に感じて。疎遠には存ぜずながら。種々の塵務に障へられ因循として打ち過ぎけるに。來日將に草庵に歸らむとす。夜半にふと存じ出し。覺えずはね起き。老眼を摩挲し。孤燈をかゝげて。心に浮びゆく事どもを書き綴りたるに。鷄鳴より天明に至りて。漸くにして清書し終つて。以て進呈す。唯肝要は至善の大事なるぞと覺悟し給ひて。文句の顚倒字形の烏焉は。穴がちに咎め給ふべからず。寶曆甲戌冬十月二十五日。沙羅樹下老衲書。



三教一致の辯　終

慎しみを、己のが心の根とすれば、言葉の花は、見事咲くなり。

人は皆、吉野の山の花を見よ、我は、難波のあしといふとも。

はらからの中も、互の讎となる、欲ははげしき劒なりけり。

死んだのち、佛と成と思ふなよ、しなぬ内こそ、眞の妙法。

道ふたつ、仁と不仁の追分けや、左は地獄右は極樂。

矢さけびの、修羅の昔を忘れつゝ、蚤蝨の蠅を、いとふ御代かな。

子守唄

子守り唄をばうたうて聞かしや。うたやよい〳〵

よい子に成るぞ。其子何處にと尋ねて見れば。ど

こに居るやら無明の闇で。ありか知れねど餘處て

は無いぞ。母の胎内宿りしよりも。遂に離れず身

に引き添うて。熱い冷たいよしあし共に。差圖次

第に任せて置けば。悪い事せず善い事ばかり。神

も佛も外には無いぞ。されど日々悪智恵付いて。

氣隨氣儘の手勝手仕出し。いつの間にやら此子寶

に。凡夫頭巾を冠ぶせて仕舞ひ。あたら寶の持ち

ぐさらしよ。酒と色とに其身はたゝれ。遊樂(ゆうらく)夜あ

そび朝寝と小言。欲に目のない博奕の勝負。勝て

ば勝ちたし負くれば惜しく。山をこかそか山から

こかそ。喧て世渡りや浮べる雲よ。榮耀榮華も昨

日の夢ぢや。兎角正直正路に習へ。天地國王主人

や親の。恩の重きに心をつけて。衣服食事に奢を

するな。寒うひだるう無ければよいぞ。家財諸道

具かざりは入らぬ。雨露にあたらず用さへ叶ひ。

すめば住吉奢らぬ心。伊勢の太神三杵の御供。宮

は茅葺きおごらすまいと。神の惠みのアラ有難や。

貧と福とは天命なるぞ。知らて無理せば其身の過

よ。心正直少欲なれば。貧は貧ても不足はないぞ。

結句金持苦勞の種ぢや。へらすまいとて貪欲すれ

ば。親の金をも盗むに同じ。終に家庫空しく成ぞ。

寶へらさぬ工夫と言ふは。我身つゝめて仁心發し。

慈悲と情で人をば助け。家内眷屬一家を始め。友

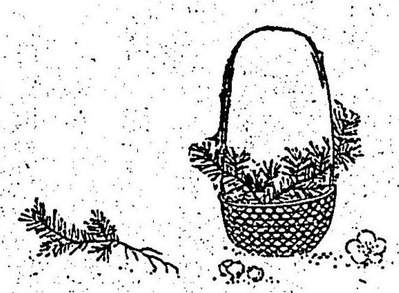
と知音も成丈すくへ。金は限りのあるものなれば。

入るを計りて出だすが好いぞ。儉と吝とをよく辨

へて。儉は我身の奢を省き。吝は内外に辛き目み

せて。不仁不義から爲す業なれば。我に足る事知らぬが故ぞ。餓鬼の苦患と言のはこゝよ。信さへありや貧者も仁は。出來るものだよ貪欲瞋恚。愚癡を離れりや皆慈悲心よ。身にも口にも意は猶も。人の助や世界の道に。よかれ〳〵となすわざなれば。直に神なり菩薩の行よ。士農工商皆受け得たる。己が家職を大事にすれば。我と天地と相應いたし。四海兄弟他人はないぞ。しかも佛の御法の敎。きけば一切男子も女子も。共に生々のわが父母ぞかし。しかし他人の氣に入るとても。主と親とに背いた時は。神や佛の守は無いぞ。主は日月父母天地。之に仕へて忠孝すれば。神や佛を祈らずとても。常に身に添ひ守らせ給ふ。後生極樂外では無いぞ。子供そだてが大事で御座る。子供よければ我世を讓り。隱居したとこ安樂世界。現世安穩未來も淨土。後生願がたらはぬ時は。隱居しながら子の世話燒いて。鬼の呵責や閻魔の役目。親子諸共此世が地獄。子供始は性善なれど。愛が過ぎれば氣隨に成るぞ。友を撰ぶが先づ第一よ。友が惡るけりや惡るいがうつる。友が咳つきや咳つき習ふ。麻につれたる蓬の草よ。親の仕業が皆子に移る。親がよければ子供もよいぞ。親が欲なと子供も欲な。子供不孝て片親ないは。猶も育てが大事で御座る。父は與樂の慈の敎訓に。母は抜苦の悲の愛憐よ。是が片よりや片輪に成ぞ。五躰人なみ心は片輪。慈悲の二ッを一人の親が。兼て勤めしためしもあれぞ。むかし孟母は織りける機を切つて怒つて子を勵ませば。其子一途に學師に事へ。今も孟子と尊とばるゝも。母の慈悲より起るときけば。子供しつけが大事で御座る。奉公さすなら情をかけな。殊に女子には敎がいるぞ。嫉妬深いと衣類のかざり。是も愚癡から起るといへど。母の仕方が皆從ふぞ。母の氣隨が娘に移り。母が奢れば娘も奢る。母が癇癪娘が短氣。母を習ふが娘の道よ。外へやろふが跡目にせうが。妻は夫に隨ふ習ひ。內を納むる役目となりて。氣隨氣儘に身勝手すれば。家內亂れてしゆらくら煮へる。修羅の道こそ猶遠ざけよ。假令夫は愚にあろと。神や佛や主人と頼め。舅姑我二親よ。下をあはれみ身を高ぶるな。夫婦和合は則ち天地。心正直內外の神よ。慈悲の佛に五ッの道は。人の人たる道こそ是よ。儒佛神道皆此事よ。寢るも起きるも立ても居ても。いかに如何にと一心不亂。信をこらせばよい子が知れる。年はいくつか無量壽ほとけ。いやな顏せずさて愛らしい。又と二人は無い御子さまよ。唐や天竺十方世界。どこも此の御子一人の沙汰よ。何宗角宗もひとつの月よ。須磨も明石も姥捨山も。吉野龍田の紅葉も花も。外を尋る事では無いぞ。寒さ堪らへりや暑つさが來る。爰は娑婆とて堪忍國土。忍をなす故人ではないか。仕とも無いとも親孝行と。主人忠義と家業を勵め。是を堪らへて仕なれりや遂に。實に忠孝禮義に成ぞ。萬藝萬能學問とても。始め上手な物では無いぞ。すべて堪忍其功積り。妙に至りて師と仰がゝ。昔南都の明詮僧都。學をうとんで夜の間に寺を。出てゝ雨降り大佛殿に。宿るわしたが雨强く降り。軒の雨だれ當りし石に。穴のあきしも天然自然。堅き石さへ穴あくからは。堅い文字もしば〳〵見れば。終に了解も成りそなものと。倦むを怠らへて勤學あれば。法相一宗の知識とよばれ。今の代

迄も名のかんばしき。仕たい事にはよい事無いぞ。目子守の唄よ。此子大事に守さへすれば。生死離
啐か遊戯か奢りの沙汰か。色か博奕か朝寝か酒か。れて無漏土に至る。願ひ次第に十方淨土。寂光極
心よごれて地獄の種ぢや。是も怠らへてせぬのが樂いづれへなりと。儒佛神祖も手を引き給ひ。往
よいぞ。怠らへさへすりや人には成ぞ。悪いくせきて生れて蓮の臺。終に子守も佛の位。家内安全
よりよいくせつけよ。淨い汚いも分けたがよいぞ。目出度かりける。
地獄きたなし清いは淨土。神も佛も皆我なりと。
我意を立れば則ち邪見。家に傳はる宗旨を替へな。
國の御法度先祖の家法。堅く守るは祈禱の札よ。
欲な願て作善をこめる。神や佛は非禮を受けず。
念佛題目經讀むとても。悪と欲心忘れぬ時は。や
ぱり今生地獄に墮つる。在家却つて極樂往生。我
を離れた香華の供養。僅か一食を備ふるとても。
功德大いに罪咎のがる。思案分別皆妄想よ。我心
自空は世尊の御法。有難いぞや忝じけないぞ。心
清淨正念にして。日々に新に日々うたへ。念佛題　子守唄終



明治三十五年四月十二日印刷
明治三十五年四月十八日發行

第一輯
正價金壹圓五拾錢

東京市下谷區谷中坂町二十六番地
著作兼發行者　大橋春崖
靜岡縣沼津町本町六百九十九番地
著作兼發行者　上村義秀
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　戸上義章
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

發行所
東京市谷中坂町　天眼寺
靜岡縣沼津町　大聖寺

著作權所有

124
210

120
121

127
210

019790-001-2

127-210

白隱広録

大橋 春崖／著

M35. 4
ABG-0610